ヘブンヘルズ ～二つの世界と目立たない私～

桜川リマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヘブンヘルズ　～二つの世界と目立たない私～

【Ｎコード】
Ｎ５９４４Ｒ

【作者名】
桜川リマ

【あらすじ】
いきなり魔法の世界に飛ばされたと思ったらこれはゲーム！？
いつもは普通の目立たない私だけど、
夜になり魔法の国―ヘブンヘルズ―に行くとスキルマスターて呼ばれちゃってたり！！でもこっちの世界でも目立たない！！どうしよう！？目立ちたいよ～

まぁゲームだから別にいいけどね

現在プロローグ終了！！
これから本編に入っていきます！！

更新は一か月に一回程度ですが作者は感想が来ると更新スピードが上がります

感想、レビュー誰からでも受け付けています！！

第一話　異世界かと思ったら（前書き）

桜川リマです！！
この物語は夢の世界と現実の世界の二つの世界を描く物語です！！
ぜひぜひ読んで見てください

この物語で皆さんが楽しんでくれると嬉しいです！！

第一話　異世界かと思ったら

「剣技（スキル）――ソニックブレイカー！！」

前で仁王立ちして笑っているリザードソードＬｖ７５に切りかかる。
リザードソードは手に持った剣と盾で私の剣技を向かい打とうとする。
私が持っている剣が剣技によって赤い色をまとい始める。

「はあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

剣と盾がぶつかる。
その瞬間リザードソードの盾が破壊される。

狙いどうり

私はリザードソードがひるんでいるすきに追撃する。
新たなる剣技を発動させリザードソードのＨＰバーを減らす。
ゲージがレッドゾーンに突入した。
あともう少し！！
しかしリザードソードもそのままやられてくれるわけなく残った剣で抵抗してくる。

「くッ！！」

肩がえぐられる。
私のＨＰゲージが減る。
片目でそれを確認しながらドラゴンソードに向かって剣技を発動させる。

「剣技――アッパーカット！！」

リザードソードの横なぎの攻撃をしゃがんでかわし下から渾身の力で切り上げる！！

ゲージがなくなりリザードソードが消えていく。

私は、剣をしまいドロップしたものをウィンドウを開き確かめる。

中にしっかりと収納されていた『リザードソード（剣）』を――物体化（オブジェクト化）させ自分の剣と取り換える。

あたりを見るともう暗くなり始めていた。

狩りを始めたのが昼近くだったからかれこれ6時間は続けていたことになる。

私はそろそろ帰り始めようかと剣を鞘に入れ町に向かって歩き出す。

私がこの世界――『ヘブンヘルズ』に初めて来たのは、1年前、14歳の誕生日の夜、

親からもらったヘンテコな札をベッドに入れこの札はなんだろうと思いながら寝たときだった。

夢の中、ふわふわ飛んでいる夢を見ていた私はいきなり飛ばされた。

何事かと思っていると、私は何もない白い空間に着いた。

そこには一つの鏡が置かれているだけでそこに映る自分を呆然としながら見ていた。

すると、いきなり自分がしゃべりだした……いや自分ではない。鏡に映っている自分がだ。

《初めまして。これからあなたをヘブンヘルズへとご案内します》

……は？

何を言っているのかわからなかった。
まるでいつもやっているＲＰＧだと思った。
この空間もゲームの初期設定の時に現れるような場所だし…

《まず、あなたの名前、性別、顔、姿、ＪＯＢを決めてください》

なんで職業だけ英語なの？

一番最初に出た疑問はそこでほかのことには気にならなかった。
もしかしたらＲＰＧをやりすぎてこういったことが普通だったのかもしれないし、
夢だと思って大して気にしていなかったのかもしれない。
聞かれた性別、顔、姿、ＪＯＢは鏡に触れることで変えることができた。
顔は自分よりも少し目を丸くして顔も細くし茶色の髪を腰まで伸ばした。
姿は背を少し高く胸は控えめの１７歳位に見えるようした。なぜならオンラインゲームのようなたくさんの人がアクセスするようなゲームだと小さいとバカにされることが多いからだ。
ＪＯＢに関しては様々なものがあるらしかったが最初になれるのは『見習い剣士』か『見習い魔道士』のどちらかしかなかった。
これだとほかの人から初心者とまるわかりじゃないかと思ったが何を言っても意味がないし所詮夢なのだからと見習い魔道士を選んだ。
理由は単純に魔法を使うということに興味があったからだ。
選び終わったので完了ボタンを押す。

名前、フィル、性別、男性、姿、女のような姿、ＪＯＢ、見習い魔道士

《繰り返します。名前、フィル、性別、女性、姿、平凡、ＪＯＢ、見習い魔道士》

……え？性別が違うんですけど？しかも姿、平凡ってケンカ売ってない？

※性別の変更はできません

性別変更のところをよく見るとにそう書いてあった。
だったら聞くなよと言いたいがまぁ夢だからしょうがないと思いあきらめた。
姿的には女性だからこのままでもかまわない。

《どこか変更しますか？》

いいえ、このままで

《では、簡単にヘブンヘルズについて説明したいと思います》

ますますゲームみたいになってきた。
いや、これはゲーム好きな私だから見ているのだろう。
でも妙に実態感がある。

《ヘブンヘルズはこれからあなたが行く世界のことです。この世界には三つの大陸１４個の大小の島があります。あなたは始め三つの大陸のうちの一つエスカリア大陸にある独立町『フェルシス』の広場から始まります。フェルシスは世界の南に位置する町でとても活気があり物資の流通が盛んな街です》

いや、そんな街の説明はいいから行く目的は？

《あなたには様々なところでお願いされるクエスト、この世界にある七種の神具を集めてほしいのです》

めちゃくちゃＲＰＧじゃん…

こんな夢始めてだよ。ヘブンヘルズなんてものがでてくるＲＰＧなんてやった事ないし

《また、この世界には二次職というシステムがあります。このシステムはある町でできるので頑張ってください》

二次職ってなんだろう？夢の中でのことでもとても気になるな

なんかワクワクして来た。もしこれで始まる前に目が覚めたら泣いちゃうかもしれない

《最後にこの世界での１日は現実での１時間です。以上で説明を終了します。その他のことについては、チュートリアルクエストでわかる様になっているので皆さん力を合わせて頑張ってください》

鏡の自分が話終わると、自分の体が光を帯び始めた。

光が収まるとそこには設定した姿になった自分がいた。

頭の上にはフィルという名前とＨＰゲージだと思われる緑の線があった。

完璧にＲＰＧだ。しかも、皆さんでということは同じ様な人がいるということだ。やっぱりオンラインゲームじゃないか。

そう思っていると突然鏡が光だしドアへと変わった。どうやらここを開くとスタートらしい。

私は少しワクワクしながらただの夢ということにがっかりもしなが

ら扉を開けた。

扉を通って初めて思ったことは人が多いだ。
私と同じ様に名前とＨＰゲージがついている人が多い。
名前は多種多様でなかには名前が長すぎて途中で省略されている人もいた。
まずは何をしようかと思いキョロキョロあたりを見渡していると視界の右端に小さなボタンがあるのがわかった。
触れてみようと右手をボタンに触ろうとするが、いくらやっても触れることはできなかった。
やけになって手を振り回していると突然ボタンが大きくなり私の右手の前に表示された。
どうやらメニュー画面だったらしい。メニュー画面は手で操作できるらしく操作方法やスキルの振り分け方、手持ちボックスなどに分かれていた。
まずはメニュー画面のだし方をと思い画面を操作する。
しばらく探しているとメニュー画面のだし方についてのっているばしょがあった。
やり方は右手をサッとふるだけでいいらしい。
しまう時も同様らしく何回か出したり消したりしてみた。
次に手持ちを確認した。手持ちには樫の杖と布のローブだけしかなかった。布のローブには装備中のマークであるＥが小さくついていた。

・・・・・・もしかして下着つけてない？

胸元を開き中を確認する。
良かった。一応質素な物だが付けてはいた。
まぁ夢だからいいんだけど。
最後にスキル画面を開いてみた。

スキルには技術スキル、武術スキルにわかれているらしい。
技術スキルは剣、杖、服などの装備品を使うことや何かを採取する時に増えていくスキルでレベルなどは関係なく使うごとに増えて行く物らしい。
例えば、岩から鉱石を取る時にはピッケルスキルと採取スキル（岩）が手に入るようになっている。
これを溜めると杖や剣などの武器は装備制限のある武器を扱えるようになったり壊れにくくなったり身体能力が上がったりする。
服などの装備品は耐久値が上がったりＤＦが上がり採取スキルなどではそこで取れる物のレア度が高い物が取れやすくなる。

次に武術スキルだが、武術スキルはレベルアップとともにくるスキルポイントを割り振り新たなるスキルを解放、ランクアップさせるものである。
最初は少ししかないが、スキルをランクアップさせることによって新たなスキルが出たり技術スキルによって表れたりレベルアップと共に出て来たりするらしい。
スキルをランクアップさせることにより威力が上がったり追加効果が出たりするが、その分ＭＰを消費する量が増えていくらしい。
また、スキルポイントは毎回一定量もらえるがそれに加えレベルアップまでに何をしたかが重要になってくる。
例えば、見習い魔導士ならばいかに杖、魔法を使ったかによってもらえる量が変わる。
しかし、もらえる量の最大量は決まっているのでやり過ぎても意味がない。
これは、低レベルでのクリアをなくすためだろう。

私は一旦メニュー画面を閉じてチュートリアルクエストのある掲示板の前に行く。
そこには私と同じようなみすぼらしい姿（周りもあまり変わらない

が）をした男性がいた。
その男性は見習い剣士らしく腰に剣を下げていた。
姿は１８歳くらいで私より少し大きめ、姿は整った顔をしていた。
男性の名前を見てみると、セリムとあった。
私は声をかけて見ることにしてみた。

「あの～始めての人ですか？」

「あ、ハイ。そうですけど・・・」

うん、顔ににあった言葉使いだ。
たまにこういうオンラインゲームだととても酷い言葉使いで感じの悪い人もいるからその様な人とは付き合わないようにしなければいけない。

「私も初めてなんですけど、これって夢ですか？」

「？夢ですけど？知らないで来たんですか？」

「何を？」

「あなた・・・・・フィルさんですか。フィルさんは寝る前にふだ見たいのを枕元におきませんでしたか？」

「おきましたけど？」

「それはこのヘブンヘルズへの道となってここに連れてこられているんですよ」

「？？？道？連れてこられた？」

「簡単にいうと、札（入国書）を置いた人にだけ特定の電波が行って夢のなかでここを楽しむことができるんです」

「いわゆる実際のオンラインゲームってこと？」

「そうです。でもフィルさんは幸運でしたね。ここにくるための札は直ぐに売り切れになったっていうのに初日から入れるなんて！！」

「今日が初めてなんですか？」

「本当は二時間前からなんですけどね。僕も最初から入ろうと思ったんですけど現実でいろいろあってこんなに遅れちゃいましたよ」

「てことは元の世界に戻れるんですね！！」

「？はい。　メニュー画面にログアウトのボタンと現実世界での時間が載ってますから」

「ありがとうございます！！」

私はお礼を行って一度ログアウトした。
まずは両親にお礼を言おう。ありがとうと

こうして私の二つの世界をめぐる日々が始まったのだった

第一話　異世界かと思ったら（後書き）

どうでしょうか？
まだ説明ばかりでわからないと思いますが次からしっかりとした物語になりますのでよろしくお願いします！！

感想、誤字脱字あったら、なんでも構いませんので送ってください！！

第二話　日常（前書き）

すみません！！

二話と三話入れ替えました！！

内容的にはどちらから読んでも変わらないようになっています！！

第二話　日常

始めてヘブンヘルズに渡ってから1年がたった。（現実で）

私は高校へ行くために勉強している。　受験生というやつだ。
しかし、今の私はしていなかった。　私はぼーっと外を見ていた。
夏の暑さが教室内にたまり汗が額を伝う。　只今、自習中。
みんなは友達と一緒になって勉強しているなかで私は外を見ている。

お分かりいただけただろうか？

私は友達が少ないのである。
決していないのではない。これだけは断言する。
ただ、私は影が薄いのだ。
何故だかはわからない。姿は地味というほどではない。逆によく可愛いと言われる。（週一の割合で告られる）
まぁお世辞だと思うが・・・
顔は整っている方だし、目もつり上がっている訳でもなく垂れている訳でもない。普通だ。
髪の毛は栗色でパーマなんかはかけていないストレートだ。たまに結ぶが。
体も普通だと思う。他の人と違うのは・・・胸が少ししかないことくらいだ。Bしかない。

それだけだ。

一度これをイジメだと思ったことがある。
しかし、私に告白してきた男子に聞くと、なんでも存在感がないらしい。

いわゆる『目立たない』だ。
何をやっても平均ちょっと上なだけ。
中途半端なのだ。

そんな私にも得意なものはある。ゲームだ。
特に『ヘブンヘルズ』と呼ばれるＶＲＭＭＯＲＰＧでちょっとした有名人なのだ。
ヘブンヘルズにきた人ならだいたい一度は聞いたことがある称号？みたいなもの『スキルマスター』を名乗らせてもらっている。
多分このクラスの中でも半分の人はやっていると思われるヘブンヘルズは私が一年前の誕生日に貰ったゲームだ。

『スキルマスター』ヘブンヘルズでのスキルをすべて知っている人だと言われているが、それは違う。
私はヘブンヘルズで他の人より一歩先をいっているだけだ。

ここでヘブンヘルズについて簡単に説明しよう。
『ヘブンヘルズ』これは決められた時間にカセットと呼ばれる札を目標に流れてくる電波を脳に流し思念だけを道と呼ばれるところを通って行く世界のことだ。
このゲームの特徴は、自分がその世界で動き回れる事だ。コントローラーなどはいらない。

歩くならいつも歩いているように、と現実と変わらないのである。
違うところは、身体能力の違いとスキルと呼ばれる技を覚えられる事、モンスターが出てくる事だろう
この世界では皆がみな自由に過ごしている。
店を経営するものなどたくさんいるが、中でも多いのはやはり冒険をするものだろう。

私は店を経営している。
そして、冒険している。

このヘブンヘルズの中には当初から世界を一歩先を行くものとして『攻略組』と呼ばれる人たちがいる。
その人たちは、みんながいつも一緒になってプレイしている訳ではなく何か新しいダンジョンなどを見つけた時に皆で攻略する。
私もその中に入ってはいるが、中に入っている事を知っているのは攻略組でも一人しかいない。

そろそろ授業が終わろうとしている。
そしたら軽いＨＲをやって放課後だ。
とくに部活動をやっていない私はすぐに家に帰る。

もちろん一人で。

帰ったらすぐにでもヘブンヘルズへと行きたいところだが、ヘブンヘルズにはアクセス時間と呼ばれるものがあり、午後１０時から午前5時までの六時間となっている。
ちなみに、こちらでの一時間は向こうでの一日に当たる。最高アクセス時間六時間は六日間という事だ
だから私たちは現実世界の一日を休日とよんでいる。
争いも何もない休息として。
帰ってからはやる事がないので、受験勉強にはげむ
私は頭が悪い訳ではない。理由は簡単。

友達が少なくて遊ばないからだ。

勉強も一段落し、夕食、風呂に入る。
そしてＰＣを立ち上げる。

検索エンジンから慣れたてつきでキーボードを叩く。
現れたサイトに入りパスワードを打ち込む。

スキルマスターさんが入室しました。

画面に文字が上がる。
このサイトは攻略組の一人が作ったサイトで皆が情報交換に使うチャットのようなものだ。
私は他の誰とも会話をする気はなく、今日皆が話していた事をみて少し微笑む。
内容は、スキルマスターについてだった。
様々な憶測が出ているみたいだが、何個かあっているのがあり面白い。
私は一方的に何度か打ち込み最後に店の宣伝をして落ちる事にする。

スキルマスターさんが退室しました。

PCにそう出たのを確認して電源を消す。
そしてヘブンヘルズへ行く準備をする
準備といっても寝るだけだが。
これが私の日常だ。

第二話　日常（後書き）

どうでしたか？

感想、質問待ってます！！

第三話　チャットルーム（前書き）

まだ世界の話が全然ですが読んでいただけると嬉しいです！！

第三話　チャットルーム

チャットルーム【ヘブンヘルズ攻略組情報交換ルーム】

現在の人数　２／３８

※注　この場所はゲーム《ヘブンヘルズ》の攻略組（ゲームの一足先を行く人たち）の掲示板です。　攻略組でない人は、はっきし言って邪魔になるので参加しないようにしてください。　また、デスペナが怖い人はここに来ることをお勧めしません。　ここでは、何か新発見があった時に命を捨てる覚悟で未知の領域に入っていく覚悟がないといけません。　まぁぶっちゃけ臆病者は去れってことです。　（ここのパスワードは攻略組しか知らないと思いますが…この注意書きはうっかり知ってしまった人のためです。）ｂｙ管理人クロイツ

クロイツ「皆さん管理人のクロイツです。　何か最新情報あったらどんどんレスください！！」

まりあ「こんにちは～まりあです～。　皆さんシーズン諸島には行きましたか～？　あそこのサマー島にある塔に何か意味があるそうなんですが知っている人いませんか？」

クロイツ「まりあさんこんにちは～。　シーズン諸島といえばとても絶景ポイントが各島にあるんですよね～」

まりあ「はい～！！　とてもきれいです～」

シルクさんが入室しました。

シルク「こんにちは～」

クロイツ「シルクさんいらっしゃあ～い」

まりあ「シルクさんは知ってますか～？」

シルク「すみません。　私は今ポートフェルトの近くにあるダンジョンにいるので…」

まりあ「ああ～ブラックドラゴンがいるといわれているダンジョンですよね～　名前なんて言うんですっけ～？」

クロイツ「あそこは過去レスから見るとスキルマスターさんがアイルの洞窟って言ってましたよ。」

まりあ「スキルマスターさんですか～　あの人謎だらけですよね～」

シルク「あの人ってユーザーネームなんていうんですかね」

クロイツ「ここでの名前は大体の人はあっちでの名前を使っているのにスキルマスターさんは違うんですよね～　他にも使っている人はいますけど全員向こうの名前わかっていますからね～」

まりあ「管理人のクロイツさんも知らないんだったら誰も知りませんよ～　そういえば今日は集まり悪いですね～」

シルク「みんな事情があるんじゃないでしょうか？」

死楽生苦さんが入室しました。

イッチーさんが入室しました。

クロイツ「こんいちは」

ケルベロスさんが入室しました。

気軽に話しかけないでっ！！さんが入室しました。

ぬこさんが入室しました。

まりあ「続々と来ましたね～　皆さんこんにちは～」

死楽生苦「死、ぬようなダンジョンではなさそうだな　まりあが言っているのは」

気軽に話しかけないでっ！！「気軽に話しかけないでっ！！　…ごめんなさい　こんにちは～」

ぬこ「いつもお疲れ様です。　気軽に話しかけないでっ！！さん」

クロイツ「皆さんいきなり来たようですけど何か情報でも？」

イッチー「……スキルマスター」

ぬこ「やっぱりスキルマスターさんのことについてですよ～」

死楽生苦「死、かしあやつは本当に謎すぎるからな」

まりあ「やっぱりスキルマスターさんのことでしたか～」

気軽に話しかけないでっ！！「あの人って一体誰なんですか？」

シルク「皆さんが持っている情報を改めて出し合いましょう」

クロイツ「では、私から。　あの人はみんなが知らないスキルを知っていることからスキルマスターって呼ばれているのですが、女性らしいですよ。」

まりあ「そうですねぇ～　攻略組の集まりでは魔法系の職業についているということですかね～」

ぬこ「皆さんが知っていることですがあの人は、レベルがとても高いってことですかね」

死楽生苦「死、ていることといえばたぶんソロプレイヤーってことだろうな」

気軽に話しかけないでっ！！「何でもＬｖ２００以上とか…」

イッチー「……レアスキルもち。　βテスター」

シルク「私もそんなもんですね。　一つ上げるとすればフェアリー持ちということですかね」

ぬこ「本当ですか！？　あれ従えたプレイヤーが攻略組にいるなんて…」

イッチー「……フェアリーなんて捕まえにくいだけ…」

死楽生苦「死、らなかった　あんな雑魚を従えているなんて」

気軽に話しかけないでっ！！「でもサポートスキルはなかなかだと思います」

クロイツ「今思ったんですけど…あなたたち見ていたならログインしてくださいよ！！あとケルベロスさんしゃべってくださいよ！！毎回こんな感じですけど…

では、まとめてみると

○女性
○ソロプレイヤー
○いつもは魔法系の職業
○レアスキル有
○ＬＶ２００以上
○βテスター
○フェアリー持ち

みたいなものですか？」

ぬこ「でもおかしいところがあるんですよね～。　私とクロイツが所属しているギルドの隊長が１９８Ｌｖで現在攻略組の中で最高のはずなんですよね～」

クロイツ「そうなんですよね～。　もしかしたらレアスキルの効果とか」

まりあ「お二人のギルドって～『疾風必勝』でしたっけ～　相変わらず変なギルド名ですよね～」

クロイツ「そのことについては隊長に言ってください」

スキルマスターさんが入室しました。

スキルマスター「こんにちは」

スキルマスター「私のことを話しているようで嬉しいような嬉しくないような不思議な気持ちです」

スキルマスター「皆さんがあげてくれたものの中にはあたりもあるしはずれもあります。」

スキルマスター「今度のサマー島の塔について皆さんが調べる際私も行きますのでここに書き込んでおいてください」

スキルマスター「では、私はこれで。」

スキルマスター「皆さん、今日も向こうで死にませんようにショップでゴルゴンゾーラを買うことをお勧めします」

スキルマスターさんが退室しました。

クロイツ「また一方的に言ってしまいましたね」

ぬこ「そうですね～」

まりあ「まぁ～そろそろヘブンヘルズにログインする時間ですしね～」

イッチー「……あの人も忙しいのかも…」

クロイツ「そろそろ私たちも準備しましょうか～」

シルク「っていうかゴルゴンゾーラって？」

死楽生苦「血、ーズの一種だな」

気軽に話しかけないでっ！！「それって向こうに売っているんですか？」

まりあ「たしか～ＰＣのお店で売っている場所があったような気がします～」

ぬこ「それってドコ？」

まりあ「忘れました～でも効果は六時間ＤＦを１．２倍上げる効果ですよ～」

クロイツ「それってスキルの防御アップ（フェニアス）の威力少な目、効果長めのアイテムですね」

シルク「作り方教えてほしいです～」

まりあ「でも、シルクさん料理スキルあまりないですよね～」

シルク「そうでした」

クロイツ「落ちますね～」

まりあ「私も～」

クロイツさんが退室しました。

まりあさんが退室しました。

ぬこ「私も落ちます。　あちらで会えたら会いましょう。」

ぬこさんが退室しました。

死楽生苦さんが退室しました。

シルク「今週はサマー島に行ってみます」

シルクさんが退室しました。

気軽に話しかけないでっ！！「私も行きます。　あ、しばらくここにログインすることができなくなると思います。　すみません」

気軽に話しかけないでっ！！さんが退室しました。

イッチーさんが退室しました。

ケルベロス「私も行きます…」

ケルベロスさんが退室しました。

第三話　チャットルーム（後書き）

次からは絶対に本編です！！

感想お待ちしています！！

第四話　私の友達（前書き）

今回からちゃんとした本編です！！

呼んでください！！

第四話　私の友達

いつもの時間になり私はヘブンヘルズへと旅立つ

始めに行く場所は、毎回白い空間だ。鏡が一つだけある。そこで認証される

《ログインしますか？》

はい

《名前認証を行います》

ユーザーネーム、フィル

《完了しました。少々お待ちください》

ログインする場所、脳波、名前を確認してようやく前にログアウトした場所に転送される。

転送時の光が消え目を開けるとそこはケンビア諸島にある小さな町『キェリル』の中にある小さな店『ヴィース』の部屋の一室だった。

ここ、ヴィースは私が経営しているお店だ。

とても小さい町の中の路地裏にあるのでお客が来ることは滅多にない。

このお店は、ある意味特殊だ。

一階は、雑貨屋（自分で錬金、配合したもの）

二階は、工房（もちろん手作り）

三階は、自室&宿屋
となっている
普段開放しているのは一階のみだがお得意さんには二階を案内している。
三階は本当に個人的な友達にしか開放していない
……私にはこっちにも友達が少ないが

「フィル～おはよう～」

「あ、まりあ。おはよう」

私が部屋から出てくるとリビングにパンを食べている一人の女性がいた。
女性の名前は『まりあ』
この世界でトップに入るプレイヤー『攻略組』の一人で、私の影の薄さをものともしない女性だ。
姿は、ながくすらっと伸びた黒髪に青色の目、ふっくらとした胸、
雰囲気は、言葉通りおおらかとした感じでとても明るい人だ
私の数少ない『友達』だ

「まりあ～なんで先に食べているの？」

「だって～フィルちゃんが遅かったんだもん」

「ちゃん付けしないでって言っているでしょ」

「でも～…年齢差があるし」

実際、まりあの年齢は２３歳くらいだ。

私は17歳……に見える
見えるというのはこの世界ではだからだ。
現実ではまりあと私は同年齢だったりする

「っていうかなんで来たの？職業変えた？」

「そうなんだ～私の職業～賢者に変えようと思って～」

「賢者ぁ～？前にもやったでしょ」

「だって～賢者の～スキル覚えきったわけじゃないし～次の～サマー島で賢者のスキルのほうが～いいでしょ～」

「ああ、チャットで言っていたやつね～でも、賢者じゃなくてもよくない？」

「フィルと一緒に行くんだったら～後方支援のほうがいいでしょ～」

「ちょっ！？私も行くの？」

「だって～私一人じゃ～弱いし～」

「待って待って！！あんたそれでも『攻略組』の一員！？それにふつうまりあはソロでしょ！！」

攻略組は主にソロプレイヤーが多い
まりあは、ギルドに入ってはいるが基本一人のため決して弱くはない

「確かにまりあは魔法のほうが強いけどさ～」

「行こうよ～」

「わ、わかった、わかった。行く前に準備して、リーダーに伝えていくよ！！」

「ええ～あの人に～伝えるの～？」

「伝えなきゃうるさいから」

私とまりあはギルドに所属している。ギルド名は『フェリアス（自由）』
このギルドはとても自由で他のところとは違いいつも一緒ではない。
メンバーも多いわけでなく私たちを合わせて７人だ。
その中でも攻略組は私とまりあだけだ。
いるのがおかしいのだけど…
レベルもまりあのほうがリーダーよりも高い

「じゃあフィル～ゴルゴンゾーラと回復薬Ｌｖ５売って～」

「それだけ？装備は？」

「じゃ～一式～」

「わかった。いま、まりあのＬｖは？」

「１７９～」

「また高くなったのね」

「いや～それほどでも～フィルは～？」

「私は１５７」

「フィルも上がったじゃない～」

「まあね～」

はい。といって装備を渡す。
もちろんメイド・イン・フィルだ

「全部で１０９４２４ゲルになりま～す」

「ええ～！！高すぎるよ～まけて～」

「当店ではびた一文まけません」

「うう～わかったよ～」

この世界ではゲルがお金の単位となっている。
まりあからゲルをいただき装備を渡す。

「あ、このムニュルの杖は光属性の威力が１，５倍になるから。まりあにはちょうどいいんじゃない？」

「ほんと～？役立つね～」

「あとは何がほしいんだっけ？」

「えっとね～ゴルゴンゾーラと～回復薬Ｌｖ５と～あと～いつもの～」

「わかったわ。でもそれって結局いつも通りじゃない？」

「うん～」

「じゃあ全部で２７４５ゲルになりま～す」

「だから～まけてよ～」

「私に勝ったらね～」

「ひ～ど～い～」

たわいのないことを話しながらものを渡す。
ちなみにまりあより私のほうが強い。それはいまの職業のせいもあるし特別なスキルもあるから

私も準備を整えてすぐにリーダーのもとに連絡する。
リーダーの家はこの町ではなくほかの大陸にある。
いちいち行くのは面倒だからギルド名簿を開きメールを送ることにする

『まりあと一緒にシーズン諸島に行ってきます』

と、簡単に書いて送る。

「フィル～パーティー組も～う」

「わかったわかったから」

「じゃあ送るね～」

まりあからパーティーの参加要請が来る。
ここで断っても面白いのだけど早くに行きたいので受ける。

パーティーになると経験値が毎回分割される。
また、どこにいても連絡が取れるようになる。
しかし、スキルは分割されない

「じゃあいくよ。そういえばまりあ何で来た？」

「ええ～船と～電車で～」

「じゃあ空港まで私の車で行こう」

「空港ってことは～私たちの飛行機で行くの～？」

「当たり前」

この世界では車や飛行機の免許とかはない
でも操作を誤ると壊れるのは同じだから一応教習所に入った

飛行機というのは私とまりあ、二人のお金を合わせて買ったものだ。
二人で一緒に行動をすることが多いから各地へスキルを使わずすぐに行けるようにだ。

ヴィースはＮＰＣに任せることにする

「めんどくさいよ～テレポーション使っちゃおうよ～」

「いやだ、技術スキル貯めたいもん」

「そんなんだからレベル上がらないんだよ～」

「五月蠅い。私よりも強くなってから言ってよ」

「うう～」

「早く乗って」

私はガレージから車を持ってくる。
この車は私が自分で作ったものだ。
私の二次職は『職人』
この職業は様々なものを作る職業だ。
普段は武器や装備を作るけどたまに大きいものを作ったりする。
武器や装備は『鍛冶師』で作れるが大きいものは作れない
私の職業は鍛冶師と『調合師』、『薬剤師』を合わせた上級職だ。

私のように二次職を戦闘と関係のないものにする人は少ない
大体の人は二次職も戦闘職にする人が多い
なぜなら一次職でなれる職業にも二次職としてなることができるからだ。
私がなぜこの職業かというと、簡単に自分の装備は自分で作りたかったからだ。

ちなみにまりあは二次職を『神職』にしている
神職は、文字通り神に通じる職業でこれも二次職限定だ。
どのような職業かというと主にサポート系のスキルを覚える。
すべてが光属性という物で少しだが攻撃系のスキルも覚えるため闇属性の相手にはとても強い

まりあが車に乗ると私はエンジンをかける
操作はすべて手動だ。
この車は他のとは違う
他の売っている車はオートと手動の二つを切り替えられるがこの車にはオートはついていない
そのかわりに技術スキルの溜まり方が1，5倍になるようになっている。
車で使う技術スキルは『小手先』『索敵』『注意』だ。
この車を作ってからこの三つのスキルがたまるのはいいことだった。

現在
小手先　７８９２／１００００
索敵　１００００／１００００（コンプリート）
注意　５９２４／１００００

だ。本当はスキルのよって限界が違うのだがこれらは全部１０００だった。

車を走らせながらまりあにスキルを使ってもらうことにする

「まりあ～防御膜（プロテクション）この車に張っておいて～」

「ん～分かった～」

「あと、早くにつきたいのならステルスかけておいたほうがいいよ～」

「ん～」

まりあがスキルを使う。私も使えるのだが、まだ片手間に運転する

のは怖い
現在まりあは『ルネ』と遊んでいる

ルネとは、私が使役している『フェアリー』だ。
姿は、小さな人間のような姿で常に光っている。
長くきれいな羽がとても特徴的だ。
ルネは、長い金色の髪がとても似合っていて可愛い

フェアリーは見つけにくいくせに弱いということで人気がない。
ただ、倒すとレアな装備を手に入れられるということで狩る人は後を絶たない

私がルネと出会ったのはもう2か月ほど前になる。こっちの世界でいうとやく一年?前になる
ルネが他プレイヤーに攻撃されて弱っているところを助けたって感じだ
それ以来ルネは私と一緒にいる。
今では姉妹みたいになっている
普段は人見知りだがまりあと、とても仲が良い

実際フェアリーは弱い。
それを否定するつもりはない。
しかしフェアリーを使役することで得られる効果は絶大だ。
使役するモンスターによってプレイヤー自身が強化される。
たとえば『ドラゴン』を使役するとＤＦがあがりドラゴンの属性によってその属性の技の威力が上がる
そしてドラゴン自身も戦力として使うことができる

フェアリーの場合、まず戦力として考えることはできない。
その代りフェアリーが使うサポートスキルはとても強い。属性もス

キルによって何でもあげられる
また、プレイヤーが上がる特典としては、スキル『フェアリー』を取得、スピード強化、回避強化となっている。
スキル『フェアリー』は文字通りフェアリーが使う魔法を使えるようになるスキルだ。
フェアリーのスキルを取得するにはフェアリーとの親密度が最高まで行かなくてはならない
現在私が確認している中では私しかいないはずだ。
フェアリースキルの中には『フライ』がある。
これは、スキルをかけた対象が空を飛ぶことができるスキルだが、フェアリースキル以外にはないスキルだ。

私はあまり使ったことはない。なぜなら、そのことをあまりほかの人に言いたくないからだ。
知っているのは、まりあを入れて五人くらいだ。

まりあとルネを片隅に見ながら車を進めると目の前に空港が見えた。

「空港にそろそろ着くよ～」

「ん～ルネちゃんそろそろだって～」

「はいです～」

「車ごと飛行機に乗せたいけど乗せられる？」

「できないこともないけど～サマー島って車で回るほど大きくないよ～」

「そうだっけ」

「それにマスター、今は攻略組の人がいるのではないですか？」

「あ、ルネありがとう。車だと目立つか…あとマスターって堅苦しいからやめようよ」

「でも～まりあさ～んどうすればいいでしょう？」

「ん～と、二人とも姉妹みたいだから～お姉ちゃんって呼ぶのは～？」

「！！ちょっとまりあ！！変なこと吹き込まないで！！」

「だめ～？だったらフィルさん～…なんか違うな～フィルちゃんは～？」

「そ、それなら…」

「じゃあそうします～」

このごろルネが語尾を伸ばすようになった。
それはまりあと接しているからだろう
私もたまに伸ばしちゃうし

車を止めてみんなで飛行機に乗り込む
操縦はＮＰＣだ。
これぱっかりはシステム上決まっていることなので仕方がない

「目的地は、シーズン空港で」

「はい、わかりました」

ＮＰＣに告げ私たちは席に着く
自家用ジェットだから席は少ないし飛行機自体小さい
それでも十分広い

「シーズン諸島まで２時間か～」

「それまでどうする～？」

「私は勉強する」

「じゃあ私もします～」

「フィルもルネちゃんもやるなら私もやらなきゃね～」

結局みんなで勉強会だ。
私が現実で手を抜いているのはこういう空いた時間にやっているからだ。ちなみに成績は中の上だ。
これでも受験生だしね。
ルネは別にやる必要はないのだが私がやっているのを見て一緒にやるようになった。
学力は小学５年生くらいだろう
わからないところはまりあと一緒にやる。まりあは私よりも頭が悪いが悪すぎるわけではない。

「よしやりますか…装備『レイティ』」

メニュー画面を出してとても小さい短剣を出す。

「またフィルそのやり方〜？」

「あったりまえ」

まりあとルネは二人とも普通のペンだ。
私は短剣。
なぜならこのやり方なら短剣スキルをためることができるからだ。
その分書くスピードは落ちるけど
がりがりと紙に傷をつけていく
一枚書き終わるとインクを薄く筆で塗る
そうすると答えが浮かび上がるやり方だ

みんなで勉強しながら時間をつぶしているとそろそろ着くとのアナウンスが流れた。

さぁこれからは姿を消してサマー島の探索だ！！

第四話　私の友達（後書き）

感想いただけたらとても励みになります。

読んでいただきありがとうございます！

第五話　サマー島で（前書き）

今回から戦闘シーンが始まります！！

……今回は短いですが

では読んでください！！

第五話　サマー島で

シーズン諸島
それは四つの大きな島で構成されている

一つ一つが春、夏、秋、冬となっている
今回調査するのはサマー島だ。
サマー島は文字通り夏をイメージしたものだ
一年中、真夏のような暑さのため海水浴を楽しむために訪れる人が多い

「ああ～熱い～」

「熱いね～」

「熱いのですか？」

ルネには熱というもの感じない
なんでも体の周りに風をまとわせているからしい

「お、まりあも来たのか！！」

「グレイドルさん～そりゃ～私が言い出しっぺですから～」

グレイドルは攻略組の中でもトップのＬｖを持つ男だ
攻略組の中でトップということは、この世界で必然的に一番となるＬｖは１９５だ。
また、グレイドルは攻略組を束ねるリーダーとして皆から親しまれている。

グレイドルが持っているギルド『疾風必勝』は、数あるギルドの中でも攻略組が多数集まってできているギルドだ。
グレイドルはβテスターでもある。

「何か見つかりましたか～？」

「いんや、全くだ。うちの参謀に任せてもわからないっぽいな」

「クロイツですか～？」

「ああ、あいつは今ギルド内で調べているんだがな」

「クロイツは弱いですからね～」

「ははっ。ちげえねぇ！！」

まりあとクレイドルが話しているとき私はルネと二人で塔の謎を探していた。
塔の周りを探ってみるが何もない

「ルネ、そういえばここに攻略組は何人いる？」

「えっと～疾風必勝の人たちを入れて7人ですね」

「え！？でも疾風必勝の人は4人しか見当たらないけど…」

「そうですよ。あとは他の人です。ソロの人とか、ほかのギルドの人とかですね～」

「私の存在を知っている人はいる？」

「はい一ｒ一一」

「ああ～～ギル見っけ～」

私は一人で調べている男に駆け寄った。

「ああ、フィルか」

こっちを向いて軽くあいさつしたのは『ギルバート』
βテスターにしてソロプレイヤー
ギルバートのＬｖは１８７でこの世界では二番目だ
私のことを知る数少ない人だ

「ギルは何か見つかった？」

「いや、何も」

「ふ～ん、まぁ何か見つかったら言って」

「ああ」

私はギルと別れてルネのところに戻る

「ああ～めんどくさいな～」

「こうも手掛かりがないとですね～」

「あ、ルネ～まりあもお話に夢中だから狩りにでも行く？」

「そうですね～それもいいかもしれません」

サマー島の舗装された道を外れ横道に入る。

歩いてしばらく行くと目の前に

「フィルちゃん！！マウントゴーレムです！！」

「わかってるわ！！もともとここにはゴーレム系しかいないんだから」

「何でしょうね？」

「もしかしたらあの塔と何か関係があるのかも」

「なるほど～あ、来ますよ！！」

「うん」

私は、腰から愛刀『夜月』を抜く

マウントゴーレムＬｖ１２８は、滅多に出てこない。

サマー島……いや、シーズン諸島は主に観光目的としてくる人が多いためモンスターは少ない

そのためか出てくるモンスターはとても強い

「ルネ！！サポートお願い！！あと、攻撃受けないように自分にも！！」

「はい！！スキル――『ステルス』！！スキル――『攻撃アップ（バリアス）大）』」

「よしっありがとう!!」

マウントゴーレムに向かって縦に切りかかる
マウントゴーレムは巨体に似合わず素早い動きでかわす
私は切りかかりながら呪文を唱え始める

「マ・デリア・アル・コウ・ダ・ブロウ!!『エタルシス』!!」

手から火系の上位魔法の魔法陣をだしマウントゴーレムに向かって放つ
巨大な炎塊を出す。
さしずめ大きな溶岩だろう。マウントゴーレムは片手で防ごうと前に手を出す

「フィルちゃん!!マウントゴーレムは魔法に強いよ!!」

「え!!ホント?」

だったら…物理オンリーで行くしかないか…

「ルネ!!」

「はいっ!!」

「スキル一一『スロウパニッシュ』!!」

「スキル一一『ホワイトカーテン』」

夜月から紫色のエフェクトが出る

ゆっくりと夜月をマウントゴーレムに切りつける
マウントゴーレムは即座によけようとするが不可視の壁に阻まれる
夜月がマウントゴーレムを切り裂く
マウントゴーレムのＨＰバーが即座に消えてマウントゴーレムが霧散する

スロウパニッシュはとても剣速が遅い代わりに絶大な攻撃力をもつ技だ

ホワイトカーテンはフェアリー特有のスキルである一方への動きをなくす技だ

この二つを使うことにより私とルネは様々な敵に勝ってきた

「よし！！」

「フィルちゃんやったね！！」

二人で息を合わせる

「「私たちの息ぴったりー！！」」

「だね～」

「だな」

「わっ！！いつの間に！！」

横から声が上がる
振り向くとまりあとギルがいた

「見てたんだったら助けてよ～」

「助ける必要ないだろ」

「私もそう思った～」

「フィルちゃん！！マウントゴーレムを倒した時にドロップしたのってなんですか？」

私はメニュー画面を開き調べる
スクロールして探してみるとドロップしたものだと思われるものを見つけた

「えっと……ファルリの地図？」

「な～に～それ～？」

「わからない。きっと何かの地図だと思う」

「そりゃ、地図なんだから」

「ギルつまらない！！」

「うるせえ」

「とにかく行ってみましょう！！」

「ルネの言うとおりだね。行こう」

私たちはサマー島の地図だと思われるファルリの地図を開きしるしのついている場所を目指すことにした

第五話　サマー島で（後書き）

どうだったでしょうか？

誤字・脱字・感想、送っていただけるととっっってもうれしいです！！

読んでいただきありがとうございます！！

第六話　アリア・ブライリアス（前書き）

桜川リマです！！

今回は前回よりも長い戦闘シーンを書いてみました！！

面白ければうれしいのですが…

では、この小説が少しの安らぎでも与えられることを願っています

第六話　アリア・ブライリアス

ねぇあなたは四季の中でどの季節が好きですか？
私は、春です。

ねぇあなたは四季の中でどの季節が嫌いですか？
私は、夏です。

だ・か・ら、私はサマー島にいたくありません！！

なのに暇つぶしで敵を倒してしまったことにより私は、手掛かりとなりそうな地図を手に入れてしまいました！！

……早くに帰りたいのに

「ねえ～フィル～なに一人でぶつぶつ言っているの～？」

「暑い暑いあ～つ～い！！」

「熱いだけか」

「うるさ～いギル！！暑苦しい！！」

「それ八つ当たりだよ～ギル君は女顔だもん～」

「わ、悪いかよ！！……地図だとこのあたりだな」

地図の示す場所についたようだ
周りを見てみても何もない

ここ一帯は大きな広場のようだ。
その中心に私達はいる

「それにしてもモンスターがいないのはおかしいですね」

「ルネ、ここはきっと非戦闘エリアなんだと思うよ」

非戦闘エリア
文字通りその場所では戦闘を行ってもダメージがない、モンスターが出てこない場所のことだ
このシーズン諸島には非戦闘エリアが多数ある。
きっとここはゲーム内の娯楽の一つとして造られたのだろう

「いや、もしかしたら――」

「静かに!!」

ギルバートが発しかけたところで私が止める
何かの気配がする
私の索敵スキルに引っかからないことから人ではないことがわかる。
なぜなら人が姿を隠すスキル『ハイド』はｍａｘに行ったとしても
私の索敵からは逃れることはでき無い
ハイドスキルのｍａｘは５０００
索敵スキルのｍａｘは１００００
私の索敵スキルはｍａｘだから絶対に見つけることができるのだ。
声を潜めてみんなに伝える

「人じゃないモンスターが潜んでいるよ!!それもかなり厄介な」

「おい、決めつけるのはおかしくないか?」

「ハイドじゃあ私からは逃れることはでき無いもの」

「フィル～あなたの一番最初にコンプリートしたスキルってなんだっけ～？」

「え？……あっ！！」

私が最初に覚えたスキル。それは、『隠蔽』スキルだ。
これは、意図的にためることができないスキルだ
なぜなら、このスキルをためる方法は相手に全く気付かれることがない、いることを知られない、なんて
いう＝『影薄い』につながるという人によっては最悪スキルだ

私は最初ヘブンヘルズで現実での影の薄さを克服しようと頑張った。
が、しかしここでも私は変わらなかった。

よって、まりあと知り合うまで（現時点で私がいることを把握しているのはまりあのみだ）私はどんどんこのスキルが上がっていった。

「あ、その線はないよ！！だってこのスキルをコンプリートしたらほかの人がこのスキルを使っていたらわかるから」

「じゃあモンスターってわけだな」

「うん」

「じゃあ～私の魔法であたりを探ってみる～？」

「よろしく…ルネ準備してて」

「じゃあ～……『ホーリーリング』～！！」

まりあの聖職スキルによる技を放つ
私たちの周りを光の円が覆い尽くす。

ホーリーリングは聖職スキルの上級スキルだ
普通魔法はスペルを詠唱してから放つものなのだが今回のマリアは詠唱なしで放ったため
威力は格段に落ちる

それでも相手に当たれば大体の場所がわかるため速攻で相手を見つけるにはいい魔法だろう

「いました！！ギルバートさんの１２歩前！！」

「ＯＫ～」

ルリが相手の場所を特定しギルがそれにこたえる
ギルの愛用の武器『フラン』と『ベージュ』を抜く
ギルは『双剣使い』だ
二次職は『鍛冶師』
二つの武器ともギルが作った武器だ

「はぁぁぁぁ！！」

右手に持ったフランを横に切りつける

「手ごたえは……あった！！」

相手に攻撃が当たったため隠されていたＨＰゲージが現れる
しかしＨＰゲージに減った形跡はない

「名前は？」

「アリア・ブライリアス……聞いたことない名前ですね～」

「なんか人みたいな名前ですね」

「オレンジネーム！！」

「なるほど。ここはボスの部屋か」

オレンジネーム
これはこの場でのボスということになる
ボスの部屋にはめったなモンスターでなければほかのモンスターが出てくることはない

「姿はまだ見えないの！？」

「一瞬だけ見えてまた消えちゃったわよ～」

「ねぇ！？なんであんたはこんな時までおっとりしてるのよ！？」

「だって～おっかなびっくりしてても変わらないじゃない～」

「まぁそうだけど」

「そんなこと言ってないで少しは探せ！！」

「はいはい」

慌てて相手を探す。
姿はもうない

「私の呪文でまたあぶりだす～？」

「いいや。必要ない…ルネ！！」

「わかってます……『パウダーサーチ』発動！！」

フィールド上の一点が淡く緑色に光りだす。
ルネのスキルにより発動した『パウダーサーチ』は相手が一瞬姿を現した時にかけた魔法だ

この技を発動させることによって相手の場所がわかるようになる

「じゃあいっきますか！！」

呼吸を整え目標に向かって走り出す
しかし、私よりも先にギルが対象に向かって切りつけた

「はあぁぁぁぁぁ！！スキル――『ダブル・サーキュラー』！！」

双剣使いによる連続攻撃スキルが発動する
アリア・ブライリアス（アリア）のＨＰゲージが少しだけ減る

「全然効かない」

「あんたの力が弱いだけじゃない？」

「どうすればいい？まりあ」

「魔法で支援してみる～？」

「じゃあ私もやります！！」

「ちょっ！！ルネは私に！！」

「じゃあいくよ～『プロテクション（防護膜）』！！」

「私も！！『バリアス（攻撃アップ）（大）』」

自己スキル！！隠蔽スキル発動！！

……いや、別に発動させたくて発動したわけじゃないんだけどね！！
みんなが無視するのがいけないんだもん！！
こうなったらさらに影薄くしてやる！！

「ねぇ私は！？……もういいもん！！『ハイド』！！」

ギルがアリアに向かって再度切りかかる
それをまりあとルネが魔法でフォローする
私は姿を消して傍観する……と良心がうずくからアリアの裏に静かに動く

「くっ」

私が後ろへまわりきった瞬間ギルがアリアからの攻撃を受ける

先程まで動いてなかったアリアが獣のような素早い動きでギルの脇腹を切り裂いた

ギルは体をとっさにずらすことでかすり傷で済んだがＨＰゲージは一気に３割ほど削らされた。

「なんて攻撃力と俊敏性だ！！……まりあ！お前だと攻撃が当たったら死ぬぞ！！」

「え～ほんと～？じゃあ～少し時間稼いで～フィル～」

あ～あやっぱりまりあは気づいていたか…
まりあが魔法の詠唱に入る

あれは……！！

あの魔法ならギルと二人で魔法が完成するまで抑えるしかないか

「ギル！！５分時間稼ぐよ！！」

「ちっそれぐらいしかなさそうだな」

「ルネ！！」

「はい！！『フラワーアロー』」

空高く飛び上がったルネが弓『スクリーチ』を手にアリアに向かって弾く
全部で１６本の矢がアリア向かってゆっくり飛んでいく

アリアはそれを横に跳ぶことでかわすが何本かの矢が後を追う
また、アリアがかわすがそこにはまた矢が迫っているということを
繰り返し続け逃げ道をつぶしていく

フラワーアロー
この技は『フェアリー』スキルとは別のスキルで『狩人』で使うこ
とができる『弓』のスキルに当たる
光の矢を複数（最大８７）の矢を発生させ自分の思うように動かす
ことができるスキルである

アリアがかわしていく先にギルが待ち伏せる

「はっ！！スキル――『スプラッシュダウン』！！」

双剣使いの上級スキルによる連続攻撃がアリアを襲う
下からの切り上げ、上からの降りおろし
速すぎて剣筋が見えない

「ラスト！！フィル！！」

最後に空高く切り上げて連続攻撃が終了する
アリアのＨＰゲージは残り６割ほどになった

「わかってる！！」

筋力補正を最大限に使いアリアを上から向かい打つ

「スキル――『ダークフォース』……対象、アリア・ブライリアス
！！スキル――『スロウパニッシュ』！！」

渾身の一撃と魔法を放つ。残り４割
ダークフォースによるダメージはない。なぜならダークフォースは
相手に闇属性を付与する技だからだ

「まりあ！！」

「……主よ～我に力を～…『ヘブンズクラッシュ』～！！」

神職スキルの中で最強の攻撃魔法が発動する
その瞬間巨大な光の刃がアリアを貫く

光と闇は表裏一体
闇属性のついたアリアは光属性の攻撃に弱くなっているためかＨＰ
ゲージがすべてなくなった

やはりあの呪文はすごすぎる
私やギルも強力な技は何個かあるがあれほどの威力を持っている技
は少ない

アリアが光に包まれて消えていく

「あ、あれ？」

「光が！！」

「なんだこれ！？まりあのせい」

「私の魔法のせいではないよぉ～」

私たちにも光がつつまれる

いや、先ほどまで戦っていたフィールドが、だ

光が視界を覆う

視界が開けるとそこは…

「ダンジョン？」

「そうみたいです」

「移動系のトラップだったのか」

「もしかして～サマー島の塔の中～？」

「そうだったらいいな」

「まぁ行ってみよう」

「あ、フィルがリーダーだね」

え？なんで

「だって一番適任でしょ～」

「どこがっ！？ギルに譲るよ！！」

「いや、いい」

「なんで！？」

「めんどくさい」

「も～フィルでいいじゃん～」

だ、だったら私の言うことを聞いてもらおうじゃないの！！

「じゃあ、ギルが前衛、まりあが真ん中、私が後衛で行くわよ！！」

「マジ？」

「おおマジ！！」

「じゃあさっさといこ～」

「あの、私は…」

「私の胸ポケットの中」

「やった……うれしいです！！」

「いや、変わっていないから」

「じゃあ行くか」

さっさと歩き出すギル

私たちもついていくことにする

はてはてこのダンジョンは楽にクリアできるのか

それとも三人じゃ無理か

まぁ神のみぞ知るってことで

第六話　アリア・ブライリアス（後書き）

いかがでしょうか。

あまり戦闘と呼べなかったかもしれません…

相手の攻撃あまりありませんし……

今回は主人公の紹介もしたいと思います！！

ユーザーネーム：フィル（肩書き：スキルマスター）

本名：？

現時点での職業：一次職　魔法剣士
　　二次職　職人

コンプリートスキル数：７４

所属ギルド：フェリアス

ペット：フェアリー（ルネ）

備考：この小説での主人公
　姿は１８歳の髪の長い女性（ヘブンヘルズ）
　スキルマスターという肩書きはヘブンヘルズで有名な存在だ
がフィルがスキルマスターと知っている人は少ない

理由は、影がとても薄いという悲しい事実による
装備品は全て自作
現在、この世界で闘ったら誰も勝てないといわれているが真意はわからない
攻略組としていつも参加しているが参加していることもほかの人には知られていない模様
ペットのフェアリー『ルネ』は、フィルが低レベルの時から一緒にいるためペットとしてではなく友達、妹として思っている

……どうでしょうか？
少しでもわかってくれたらうれしいです！！

次回はダンジョン攻略とまりあの紹介もしたいと思います

最後に……感想ください！！

誤字脱字でも何でもよいのでいただけると励みになります。
また、こんなキャラがほしいという要望も受けたまっております！！

ぜひ感想ください！！返信は必ずいたしますので！！

ではまた次回！！

第七話　二つ名（前書き）

すみません！！

この前いった人物紹介は今度全て詳しくしたうえでやるのでなしになりました！！

本当にすみません！！

第七話　二つ名

「これで何階めだ？」

「えっと……２３階になります」

「じゃああと何階？」

「地図によるとあと１７階です」

私たちは今、ファルリの塔に登っている
ファルリの塔とは先ほど飛ばされた場所のことだ
なぜ塔の名前がわかったかというと途中の宝箱で地図を見つけたからだ
地図の担当はルネだ

「で、さっきからお前は何をやっている？」

「え？私？」

「そういえばさっきからフィルは戦闘に参加していないよね～」

私は手に持っていた雑誌から顔を上げる

「ああ、これ？これは、ヘルヘブ通信のクロスワードだけど。これに当選すると最新のＴＶが手に入るみたいなんだよね」

あ、この片手剣スキルが１５００になると覚えるスキルは『パルデ

ッシュ』だね
パルデッシュっと、よし！！
「お前のせいで俺とまりあのＭＰが切れかかってるんだよ！！」
「ん～？私はまだ残っているけど～？」
「ルネが手伝ってくれているから私はいらないでしょ。それにあんたはＭＰじゃなくてオーラでしょ」
「でもゲージに変わりはないだけで勝手にほかの奴が言っているだけだろ」
ここは両手剣、と
「だからやるなって！！」
「え？でも最新のＴＶだよ！！欲しくない？まりあもそう思わない？」
「そうだね～私もフィルの家にそんなのがあったら毎日行っちゃうかも～」
「いや、毎日は来なくていいから」
「フィルちゃん。私も欲しいです～」
「ってことでこれあげるからさっさと回復して」
私はギルに向かってエムピン（大）を渡す。いや、投げる

「こ、これは伝説のエムピンじゃないかあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

エムピン。それはＭＰ回復薬がとても苦いと不評を買っていた時にどこからか噂されるようになってきたＭＰ回復薬だ。
さわやかな味わいとのどを通るときにのどを少しくすぐるような炭酸が売りの一つだ

これが出てきてからは味とどこで売っているのかわからないという理由で高額で取引されているものだ
値段は効果が大きいものほど高くなるため効果（大）はとても高額だといえる

「お、おま！！何投げてるんだよ！！これいくらすると思って――」

「２３５０ゲルだよ～」

「……は？そんな安いわけないじゃん。『聖母』お前ふざけてるの？」

「だってそれ私が作ったやつだもん」

「はぁ？『強運』が？」

「あんたさっきから何私たちのこと『二つ名』で呼んでいるの？」

「いや、つい驚いて……本当にお前が？」

「そうだけど。私の本当の二つ名知っているでしょ」

ギルが息をのむ

「『スキルマスター』、か」

「あれを作ったのは薬剤師の時だから結構速い時期よ」

「そうか。だったら俺に売ってくれ！！」

「お店にきたらね～」

「なんでまりあが！？私のお店なんだけど！？」

「ん、敵だ」

ブロウマッシュ
キノコのようなモンスターが5対現れる

先程からよく出てくる低級モンスターだ
その分群れで行動してくるため時間がかかるが

「ここは……ギル～ブラッドナイトのスキルが５００たまると出てくるスキルってなんだっけ？」

「やぁぁぁぁ！！！！……は？何お前まだやってんの！？ええとシャドーブラッドだよ」

シャドーブラッドっと
よかった。これで全部終わったかな？
私も戦闘に参加するかな

「って終わってるし…」

「まぁあんな奴ら弱いしな」

「あっそ。だったら私いらないか。ルネまた任せたわよ」

「はいです～」

私は中から顕微鏡を取り出す
これであたりを見渡してモンスターの場所を見つけよう

この顕微鏡は私が作ったもので建物に対しての透視能力がある
だからモンスターの場所がわかるというわけだ

「向こうに3体いるわよ」

「あり～」

「乙」

「階段はそこを通らなくてもいけるので少し遠回りしていきましょう」

ルネが地図を見ながら言う
はぁ～そっちの方向には居なさそうだしまた暇になってしまった

なにかやることないかな～？
中を探しても目新しいものはない
あるのはエムピン数十個とその他回復薬、現在装備できない装備品

と毛糸や割引カードなどだけだ

スキルポイントでも貯めるかな？

私はいま魔法剣士だからＪＯＢスキルと技術スキルを両方貯めるとすると

細剣かレイピアか

「レイピアでも装備しようかな？」

中からレイピア『クラリス』を出す

クラリスは氷属性のレイピアだ。クラリスという名前は攻略組の中にも一人いることがわかっている

……確かあいつも氷の魔法が得意だったな。えっと二つ名は確か『氷結の仮面』だったかな？あいつ愛想ないし話したこと少ししかないし

「スキル一一『リスレシア』」

レイピアを使った魔法剣士スキルを発動する

剣の先に白い光が集まりだす

「シュート」

溜まった光の弾が一直線に飛んでいく

すぐ近くの道に当たるとそこから氷ができ広がっていく

ちょと小さなスケートリンクができた

「おい！！当たったらどうするんだ！！」

「これで早く進めるでしょ」

「私一番乗り～」

「まりあ！！……まぁ早くなるからいいが…」

「まりあ、私が道を作っていくから一番前は私」

「ん～わかった～」

私たちは軽くスケートをしながら最上階を目指した

第七話　二つ名（後書き）

ってことで次回はボス編です

感想・指摘ぜひください！！

待ってます

第八話　ケルベロス（前書き）

更新遅くなってすみません！！

その分今回は長めにしてあります！！（戦闘シーンも）

ぜひこれを読んで少しでもリラックスしていたらけたらうれしいです

第八話　ケルベロス

「スケート～♪スケート～♪楽しいな～」

「そろそろ着くわよ。まりあ止まる準備して」

すざーーすざーー

「ここです～」

ルネが私の胸ポケットから地図を見ながら言ってくる
ちなみにギルは私たちのはるか後ろを滑っている

「全く何でスケートすらしたことないのよ！！」

「ね～スキルなくても地球でやったことがあればある程度は滑れるものなんだけど～」

「まりあは現実で？」

「うん～そうだよ～あとフィル～現実じゃなくて地球だよ～」

ここヘブンヘルズは夢の中だと私は思っているけど大体の人はもう一つにの世界だと考えている人が多い
私みたいに夢だと思っている人は逆に『異端者』として皆に迫害される
だから大体の人は自分がそう思っていることを隠している
私は隠してないけど

「止まってくださ～い」

「ん」

ききーーー

「フィルこの扉？」

「はい」

「じゃあ行こうか」

「ギルバートがまだ来てないよ～」

「そう」

まだ遠くにいると思われるギルを置いていくのは戦力的にまずいさすがに二人はきつい。一人ならまだしも……

「あいつはスケーターのスキルを習得すればいいのに」

「スケーターってなっている人少なくない～？」

「少なくとも私はマスターしたよ」

スケーター。これも職業で主にスピードが高く氷雪系の呪文を使う。武器はスケートボードやスノーボードだ

「うわあああぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！どいてくれえぇぇぇ！！！！！」

ギルがものすごいスピードになりながらこちらに突っ込んできた！！

「ルネ！！まりあ！！扉を開けて！！そして避けて！！」

まりあが扉を開ける
ルネが魔法でまりあをどかす
ギルが中に入っていく
私たちが見送る

「え！？」

『いってらっしゃ～い』

「ちょっと待てちょっと待て！！」

「しょうがないなぁ～」

「冗談ですよね～」

「いや、私はそのままギルが死んでくれると嬉しいんだけど」

心からの言葉だ

まぁみんなで中に入る

「たくっあんたが戦闘スキルしか習得していないからこんなことになるのよ」

「地球にないことをやるのがいいんじゃん」

「スケーターも地球とは違うもん」

「るっせぇよ！！」

「あ、そうそうみんな集まって。準備時間に補助呪文をかけておくから」

ボスの部屋に入ったからといってもどこもボスが出るまでには少し時間がある
ここに来る前のアリアと同じようにだ
その間の時間をみんなは準備時間という

「ルネ、コンビ魔法いくよ！！」

「はい」

コンビ魔法は人型の使い魔限定の魔法で親密度が高いほど強くなる魔法だ
主人と使い魔の二匹からＭＰを消費するがその分威力は上がる
技は使い魔によって異なる
エルフなら回復
ゴブリンなら攻撃強化などだ
ちなみにルネ（フェアリー）は補助強化となっている
補助魔法の強化は名前の通り補助魔法の効果が強化されるものだ

『『フェアリブル』』

私とルネの身体に緑色の魔法の渦がまとわりつく

「じゃあみんなにかけるから『バリアス（攻撃アップ）（大）』『プロテクション』」

「私もやります『ウインドパウダー』」

二人の呪文がみんなにかかる
これでみんなに攻撃、防御、スピードが強化される

「ちょうどいい。出てきたみたいだぜ」

部屋の真ん中にまばゆい光の円ができていき徐々にモンスターを形作る
光の中から現れた姿は3メートルはある巨体の牛男だった。
その姿は、神話に出てくるようなまがまがしさを持っておりとても強そうに感じられる
見かけ倒しだと信じたいが

「でかいな」

「ルネの何倍あるんだろ～」

「わかりかねますね」

「醜いですね。この臭い。最低だわ」

「フィル。お前言い過ぎ」

それぞれ感想を言い合っていると大きな雄たけびをあげて牛男が手に持った巨大な斧で襲いかかってきた
私たちはいっせいに元いた場所を離れる

「くっなんて速さなの！？」

見た目とは裏腹に一瞬で間合いを詰めてくる
斧によって抉られた地面の破片が飛んでくる
手で防御しながら前へ詰める。
横を見るとすでにギルが足に向かって切りかかっていた

「相手の名前がわかりました。ケルベロスです！！」

ルネが上へ飛んでいき名前を確認する

「私は援護だから後ろからやるね～『ホーリーアロー』～」

まりあが素早くケルベロスの後ろに回り呪文を唱える
まりあから光の矢が放たれる

「ギル！！足じゃなくて急所を狙っていこう！！」

「おう」

ギルに一声かけ私は呪文に入る

「マ・エルタ・ブロウ『コキュートス』！！」

氷の呪文をケルベロスの足にかけたことにより相手のスピードが下がった

「ギル！！まりあ！！右足狙って！！体制崩させるよ！！」

今度は3人で一か所を狙う。蓄積ダメージさえためればボスモンスターでも転ばせることができるのだ
なるべくケロベロスをこちらに向かせておく
まりあに攻撃されたらすぐにまりあは死んでしまうだろう
また、ギルは双剣使いのため防御はさせないほうがいい
私は初級呪文を連発させる

「『ファイア』!!『ウォーター』!!『ファイア』!!『ウォーター』!!『サンダー』!!」

初級魔法5連発!!しかもすべて同じ相手の胸にだ
一見何も考えてないように打っているが意味がしっかりある
ファイアで熱しウォーターですぐに冷やす。これを繰り返すことにより相手の身体を一時的に脆くすることができる。そして最後にサンダーで水に漏電させる
初級呪文の詠唱破棄のため威力は小さいが相手を痛めつけるのにはもってこいだ

「フィル～ありがとね～私も詠唱終わったからいっくよ～『ホーリー』!!」

「おまっ!?いきなり大技出すなよ!!俺に当たったらどうしてくれるんだ!!『ヘルズ・マテリアル』!!」

「二人とも大技すぎ!?使うの速すぎでしょ!!それにギルのそれ奥義じゃない」

右足に向かって光の球体ができ爆発する
ギルがその中を走り技を繰り出した

突如ギルの後ろに門が現れてそこからたくさんの剣が出てケルベロスを串刺しにする。
そのおかげか相手のＨＰバーが２割ほど減った

固い。奥義を叩き込んだのにあと６割は残っている。
それに倒れなかった。
やはり人数が少なかったか？

奥義とは各職業スキル最強の技のことでその威力は他の技の比ではない
先程のギルが放った技とその前にまりあがアリアに向けて使った技のことを言う。
奥義には必要なＭＰが一つもないがその代り長い詠唱時間と次放てるようになるまで長い時間が必要になる

「あと半分くらいじゃねえか！！何とかなるだろう」

「バカ！！手負いのモンスターをなめてるとめちゃくちゃ痛い目を見るわよ！！」

「でも～相手の攻撃もそんなに強くなるわけじゃないし～動きも単調だから勝てると思うよ～」

そう。このモンスターは一撃が強いわけでも変則的な動きをしてくるわけでもないのだ。アリアの時のような特殊スキルがあるわけでもない。ただ速いだけ

薄気味悪い

そう感じた。油断は絶対にしてはいけない。このモンスターには何

かあるんだ。きっと

「ルネ！！危ないからもっと上から当てていって！！威力が下がってもいいから！！」

「はい！！」

先程までケルベロスの頭を狙ってずっと矢を放っていたルネに言う

ケルベロスが持ち直してきて私に攻撃を再開する。

「えっ！？」

相手のスピードが上がった
とっさのことに私は頭がついていかない。
そのまま斧持っていない手で横殴りにする。
何とか夜月で防御はしたがそのまま飛ばされる。
ＨＰバーが４割ほど減った。
急いでポーションを飲む

「攻撃力も桁違いになっている！？」

「防御もだ！！」

すぐに攻撃へ転じていたギルが言う
その額には汗が伝っている

「だったら初級呪文はダメね！！私は奥義を放つわ！！時間稼いで！！次はギルの奥義ね」

『おう（うん）』

私が奥義詠唱に入ったその時だった

「きゃあああ！！！」

いきなり攻撃対象が私から大したダメージを与えていないルネに変わった。

手に持った斧を投げルネに当てようとする。ルネは何とか避けるが今度は跳躍してきたケルベロスに当たる。そして、ケルベロスは壁に刺さった斧を抜き落下と同時にたたきつけた！！

「ルネ！！生きてる！？」

「……はい。何とか防御が間に合いました」

安堵のため息が出る。

しかし油断はできない。さっきの衝撃でまりあが気絶状態に陥ってしまった。

また、直撃を受けたギルにも相当のダメージを食らっている

「ギル！！よけて！！」

「え！？……ぐはっ！！」

ギルがポーションを飲もうとしたときギルの後ろから斧が飛んできた。

なんと、ケルベロスは叩きつけたと同時に斧を前に投げていた。私たちは土煙で見えなくなっていたため気づかなかった

ブーメランのように帰ってきた斧がケルベロスを見ていたギルに当

たったのだ。

ギルが倒れた。
死亡判定。
ギルが消えていく。

この世界では死んでも生き返ることができるが、ペナルティーがある。それはその日の道が閉ざされ強制ログアウト状態になるのだ。
そして所得経験値も減る
ログアウト状態は本来の睡眠と同じ状態になるだけなので命に別状はないがその日の分ができないとなるとかなり大変だ。なぜなら地球の1時間がこちらでの1日になるためこちらの世界には何日も入れないのと同じになる。
その間にもライバルたちは上に行ってしまうのだ

「このままりあを庇いながら倒すのは難しいか」

「実質一人ですよ？」

「そうだねルネ。だったら……転機の書、発動」

アイテムから一枚の書を取り出す

「職業ー忍者」

私の姿が変わっていく。先程まで装備していた物がすべて中に入り中にあった装備が私に装備される。

ユニーク職業。忍者
この職業は現在私しかなれない職業だ。

なぜなら魔法系の『賢者』物理系の『アサシン』の両方をコンプリートしなければならないからだ。
賢者、アサシンもなるまでにはかなりの根気が必要のため、大体の人は魔法系なら魔法系を極め物理系には手を出さない。アサシンも同様だ
しかし私は両方を極めた。だからこの職業になることができるのだ

この職業の補正は、スピードの倍加、隠密スキルをも上回る忍びの術そして詠唱スピードの増加だ。
なかでもスピードの倍加はすごい。ほかの職業にもスピード補正が上がるやつもあるが倍加はない

この絶対的スピードと詠唱の速さ、そして隠密を使えば相手にきずかれることなく勝てるのだ。
その強さのため私はなり方を公表していないのだ。
だから誰にも見せない。攻略隊の戦いでも私は忍者で参加している。
まりあにもあの人数ではさすがに気付けないらしい。
そして姿を隠している理由は攻略隊の人たちよりもレベルが低いため参加することができないからだ

「さぁ勝負の始まりです。ルネ!!私のところに!!まりあが起きる前に片付けますよ!!」

「はい」

ルネがまた私の胸ポケットに収まる
収まった瞬間私は走りだし詠唱する
うん。このスピードには相手もついてきていない。
適当に斧を振っているだけだ

「……光よ神よわが剣に集い楽園にいざなえ……『ヘブンズブラスト』！！」

戦士の奥義を放つ。私が持っている両手剣に光が集まりそれを縦に切りつける
これであとは3割
絶大な攻撃力を持つ戦士の奥義。これには相手に近づくというリスクが伴う
先程のギルの攻撃は中距離でも当たるがこの奥義は剣に対して強大な攻撃力を付ける物のため剣で当てなければならないのだ。

「スキル――ダークフォース……対象、ケルベロス」

ダークフォースを当てまた相手の前から消えるように走り出す
また詠唱する

「……主よ、我に力を！！『ヘブンズクラッシュ』！！」

先程まりあが使っていた神職の奥義だ。
当然私も神職はマスターしている。

これで残りは一割を切った。

私は走りながら相手の懐に潜り込んで切りつけていく
ヒット&アウェイだ。

何度か当てたらケルベロスは消えて行った。
アイテム欄を見ると様々な報酬アイテムがあった。アイテム欄から万能薬を出しまりあに飲ませる
まりあが起きるまでに私は職業を戻しておく。

これでまた一つのダンジョンを攻略した。

「ん、ん～あれ？相手は～ギルバートは～？」

「ギルが何とかやってくれたけど同士討ちで死んだ」

「わ～さっすが～でも死んじゃったんだ～ドンマイだね～」

「そうだね。あ、そろそろ戻ろうよ。あそこに入れば元の場所に戻れるだろうし直接入るための扉も開くでしょ」

「そうだね～」

一度誰かが攻略したダンジョンは、すぐにそこに行けるようになっている。
だからここの塔に入るためにいちいちアリアを倒さなくていいっていうことだ。

「次どこ行く～？」

「私はプレゼント用意しなきゃだから帰る」

「え～誰に～？」

「弟と妹。次ログインするときに二人とも誕生日でこれ買ってもらうからその時に渡してあげる装備一式」

「ふ～んじゃあ～私もフィルのお店で～勉強してよ～」

「そういってルネと遊ぶんでしょ」

「あ、ばれた～」

「私もお勉強しますから一緒にしましょうまりあさん」

「ルネちゃんがそういうなら～」

たわいのないことを話しながら戻るともう外は真夜中だった

第八話　ケルベロス（後書き）

どうでしょうか？

上手くかけている自信がありません

もっとこうしたほうがいいとかここはこうするべきという意見がありましたら是非是非感想を送ってください！！

また、自分で考えたキャラクターを使ってほしいという人がいましたらそれも感想に書いて送ってくだされば使いたいと思うのでお願いします！！

ではまた次回～

第九話　前哨戦（前書き）

更新遅れがちで済みません！！

今回も短めですが頑張って書いたので読んでください！！

第九話　前哨戦

「えっとここをこうして……と」

私は今、ヴィース2階にある工房にて装備品を作っている。
次ここに戻ってきたときに新たに入る弟と妹のために

「確か……優奈（ゆうな）は魔法使いで美月（みつき）が戦士だったよね。」

二人とも見事に分かれてくれた。何でも二人ですべてをがんばるみたいだ。
さすが双子だなと私は思ってしまう。

「そういえば……美月達は私も守ってくれるって言ってたんだっけ」

美月が今回ここに来る前に私に言ってくれた言葉を思い出して少し笑ってしまう

『お姉ちゃんがピンチの時にも僕が助けてあげられるように強くなるからね！！優と一緒に！！』

『……うん！！守ってあげられるように頑張る。スキルマスターのように強くなって！！』

二人は私が向こうの世界でもある程度有名なスキルマスターだと知ったらどう思うのだろうか。
教えてあげたい気もするが教えてあげる予定はない。

二人とも口が軽いし私に頼りきりになってもらっちゃこのゲームの

面白さを感じることができないから…

「ねぇフィル～下の子たちに私がスキルマスターよ～って申告するの～？」

やることがなくなぜか3階では無く2階でルネと二人でオセロをしているまりあが話しかけてきた。
2分ごとに話を振ってきたり遊びに誘おうとするから少し迷惑……いやかなり迷惑だ

「しないわよ。あの子たちに伝えているのは私のユーザーネームとお店を開いているそこそこのレベルってことだけ」

「それだけしか言ってなかったんですか!?それは驚きです～」

「ルネまで…別に二つ名があることまで話すことないし」

「『強運』っていうことのほうも～？」

「うん。二つ名があるだけである意味すごい人っていうことだからね。」

二つ名は、レベルだけでは着かない。みんな攻略組の一人だったり何らかの大会で優勝していたり数の少ない装備品を持っていたりとすごい理由がつかないといけない。
まぁ私の場合は攻略組が当時必死になって討伐しようとしていたモンスターの現場で偶然居合わして死なずにそのモンスターの最後を見届けたことから現在の『疾風必勝』のギルド長であり攻略組のリーダー的な存在であるグレイドルからなずけられた二つ名だ。

「そう～あ、ルネ～これで私の勝ちよ～」

「え！？嘘ですよね～まだ半分くらいしか進んでないじゃないですか」

少し気になったので後ろを振り返ると確かにオセロの盤は半分くらいしか埋まっていない。

それに取り立てどちらかの色が多いというわけでもない。ルネが驚くのも当然だ。

でもこれは確かにまりあの勝ちだろう。まりあが言ったんだから絶対だ。

あの子の頭はどんな構造なのか知らないが勉強はあまりできなくてもその他のことはとてつもなく頭がいいからだ。

「フィルもやろうよ～」

「あんたとやったら負けるから嫌！！あ、でも模擬戦ならいいよ」

「え～だったら……やる～」

「ええ～！？」

まさかほんとにやるとは思わなかった。

でも私が言ったことだからやらなきゃな～

ああ～でもいま魔法剣士だっけ？ルネとの連携は今回なしだろうな～

「使い魔も一緒ＯＫ？」

「だ～め。私の子は今ここにはいないもの」

まりあの使い魔はまりあとともに行動することが少ない
といっても決して親密度が低いわけではなく最高までたまっている。
呼んだらすぐ来るだろうがそれまでは来ない。いわゆるまりあにと
っての切り札なのだ。あの子は。
それこそ奥義よりも強力な……

「じゃあ広場行ってやる？それともギルドの訓練場？」

「訓練場～あまりほかの人に見られたくないでしょ～」

「うん。攻略組に勝ったなんて聞いたらみんなびっくりするだろう
からね」

にやりと笑いながら言う。

「今回は負ける気ないわよ～」

「今まで一度も勝ったことないじゃないの。だったら何かかける？」

「……うん～そうしてもいいわよ～」

あれやっぱり迷っちゃった？
これは私の勝ちだな

勝負の世界では畏れたほうが負ける。
これは戦いでの鉄則だ

でもしょうがない気もする。まりあは私に一度も勝ったことがない
のだから
初めて会ったあの日からずっと

「私が負けたらまりあに現在作れる最高級品の装備を一式プレゼントするよ」

「だったら～私が負けたら～一週間の間材料を取ってきてあげるよ～」

「……いったね？」

「う～うん～！！」

これはすごい賭けに出たものだ。
私のほうは在庫があるためすぐできるからそんなに苦ではないが材料集めになると私の場合は鍛冶屋と雑貨屋の二つを営んでいるからたくさんの材料が必要となるからだ

「じゃあ行こうか。審判はリーダーでいいよね」

「うん～嫌だけど～」

まりあはウチのギルド長を好かない
まぁあの人は好き嫌いがわかれるだろう
まりあがまだこのギルドにいる理由は私がいるからしい
私もまりあがいないと私もあの人に付き合うのはちょっとつかれる

私たちは店から出て2，3分ほど歩いたところで大通りに出ると、いってもこの町自体が小さいから大した広さじゃないんだけどそこからまた１０分ほど歩いて一つの少し大きめの家に入る

ここが私たちのギルド『フェリアス』の本部である

中はとても人がいるような雰囲気じゃない。なぜなら、いつもここには一人か二人しかいないからだ。
みんなが集まるのは月に一度の総会だけ。この頃はそれすらも参加しない人もいる
フェリアスの現在の団員数は１２名ととても少ない
それでも集まらないから不思議だ

「リーダー？いるんだったら出てきて～」

「おい～出てこいよ～早くしないとこの家爆発させちゃうよ～」

物騒だ。物騒すぎるよまりあ。

「いるいる。みんなの大好きなギルド長はここですよ～」

「好きじゃないわよ！！」

眼鏡をかけた好青年が奥から登場する。
こいつの名前は『知将』マーガ。
このフェリアスのギルド長で二つ名持ちだ。
見た目とは全く違い普段は先ほどのようなうっとおしくて仕方がない性格だ
でも、戦闘時にはなかなかの強さを発揮するからすごいと思う

「ちょっと訓練室使わせて。まりあと模擬戦するから」

「おお～久しぶりですね～強運が聖母を叩くのを見るのは」

「知将さん～一度死ぬ～？」

「いえ～やめときます～」

私が勝つことは確定のようにマーガが言う
それに対してまりあが頬をぴくつかせながらまた物騒なことを言う

「で、リーダーに審判してほしいからよろ～」

「はいはいはいはいはいはい！！！！！！！いいですよ～今は私以外居ないので～」

「はいは一回でいいんですよ～」

「じゃあそうときまれば行きましょう！！」

軽くまりあの言動を流しマーガが促す

現実に戻るまで残り５日

第九話　前哨戦（後書き）

どうでしょうか？

少しずつお気に入り件数が上がってきてうれしいです！！

もしよければ感想も一言でいいので書いてくださると励みになります
まだキャラクターの名前は募集中なので感想に書いてくださるとうれしいです

では、この物語が少しでも楽しんでいただけるよう祈ってます

第十話　模擬戦（前書き）

こんにちは桜川リマです。

この頃短く作っていますがその分早くに投稿できるように頑張っていきたいと思います。

今回は戦闘シーンがありますが前回よりも短めです。

では、この物語が少しでもあなたに安らぎを与えられますように…

…

第十話　模擬戦

「いくよ？まりあ」

「いつでもどんとこ～い～」

私は手に『夜月』を持ちスタートの合図を待つ
現在まりあがどこにいるのかはわからない
声も魔法に乗せているため場所の特定には至らない

フィールドは木々が生い茂る森のようなフィールドだ。
ここがフェリアスの訓練場だ。

木に紛れて魔法を使うこともできれば、うまく木を使った近接戦の戦いもできる。
このフィールドを作ったのはもちろん私だ。

「じゃあ行きますよ～」

「ええ」

「さっさと死ないと燃やすよ～」

しないとがなんか物騒な漢字に変換されてたような…
ま、いっか。
マーガの声で始まるのを待つ。

「スタート！！」

「まりあはどこかな～？」

歩いて探す。
木の上からでも探そうか？
いや、まりあだったらどうやって私のいる場所を判断するだろうか？
魔法使いにとって大事なのは位置把握。
きっと見晴らしのいい場所にいるはずだ……と私が考えることをまりあは考えているだろう

あの子のことだから始まる前にいくつかサーチ魔法を出しているだろう
そして私が見晴らしのいいところの近くを探すと思っているだろう
からそこら辺を中心に回っているはずだ。

スキル解放――隠蔽スキル最大値解放

常時発動型の隠蔽スキルの発動型

ナイト・ブラインド

夜のような闇にまぎれ相手から隠れるというスキルだ。
これならまりあの肉眼では見つかってもサーチャーでは見つからないだろう

「あれ？」

私がぶらぶら探しているといきなり魔法が飛んできた。
しかもかなりの大技の聖系魔法

まぁ油断していたわけではないので一応よけれたけどそれでも少し

ダメージを負ってしまった

「まりあどうしてわかったの？」

「裁きの雷～」

答えの代わりに雷属性攻撃が来る
場所が確実にばれている！？

なぜ！？

早く場所を見つけなきゃ！！
このままでは少しずつでも確実にやられてしまう

ここから魔法が狙える場所と言ったらあの少し大きめに作られた木しかない！！

私は急いで走る。

そして――

「みぃつけたま～り～あ」

「……ぶつぶつ……え～！？あれ～？何でわかったの～？」

「えいやっ！！」

あとはもうこっちの攻撃で終わりだ。
もう魔法を放つ暇を与えない

まりあは近接戦が全然できないから低級魔法しか使ってこない
ダメージを受けても微々たるもののため無視して攻撃し続ける

ピピーー！！

終了を告げるマーガの魔法の音が鳴る

「また私の勝ち～！！」

「あ～んま～け～た～」

「でも今回は危なかったわよ。何で私の場所があんなにわかったの？魔法も使っていたのに」

先程から気になっていたことだ。
なんでナイト・ブラインドを使ったのにわかったんだろう
いくらまりあでもこのスキルの後に見つけるのには時間がかかるはずだ
最初から場所を予測していたとしか思えない

「それはね～フィルの考えることを読んだんだよ～」

「え？」

「フィルのことだから見晴らしのいいところの周りに行くだろうな～と思って～」

相変わらず頭いいな
裏をかいたと思っていたのに。それすら読まれていたか

「でも負けちゃ～意味ないですよね～」

「うるさいですよ～それに私はあんたなんかには負けませんし～」

マーガがやってきて笑いながら言う

それをまりあがうっとおしそうにしながら噛みつく

「はは～私はまりあさんみたいに強くありませんしフィルのように強運の持ち主でもないので勝てませんよ」

「私の名前を呼ぶなです～」

「ああもう。まりあはからまない！！リーダーありがとうね。じゃ」

「はいは～い。また来てください。そろそろクロード戻る時期だと思うので」

まりあの手を引いて外に出る

全くなんであんなにリーダーに絡むんだろう

「まりあ、私はまた武器作りしなくちゃいけないんだけどアダマンティウムが足りないからさっそくとってきてもらえる？」

「わかった～戦闘でストレス発散させろってことね～」

「わかってくれててうれしいよ」

まりあと大通りでわかれる

私はまた自宅に戻って作れるものを作ってしまおう
上手くいかないかもしれないけど『マスタリーウェポン』ができる
まで何度もやらなければ…

第十話　模擬戦（後書き）

どうだったでしょうか？

誤字報告や感想待ってます。

こんな感じのキャラがほしいとか自分で考えたキャラを出してみてほしいという方は気軽に感想に書いていただければ幸いです

お願いしたいのは

ユーザー名

職業（二次職も）

レベル

性別

容姿（髪型や色）

性格

得意技

使い魔（いれば）

備考

・どうしてヘブンヘルズに来たか
・どのようなキャラか

etc

と、このうちのどれか一つだけでも構いませんので出していただけると嬉しいです。

次回は、新キャラが登場します！！

では最後に、この物語を読んでくださったすべての人に対して感謝したいと思います。

第十一話　出会い（前書き）

こんにちは！！
桜川リマです
アニメイト新宿店今日開店ですね！！
かくいう私も現在向かっていたり・・・

今回は番外編的なものになります

この物語があなたの安らぎになります事を祈って・・・
ではいってみましょう！！

第十一話　出会い

たくっ
私が何であいつのとこにいなくちゃいけないわけ？
私はフィルちゃんがギルドに入るって言っていたから入ったのに
よりにもよってあいつのところだったなんて
そもそもあいつとは会った時から最悪だった。
そう、私が今いるこの洞窟で初めて会ったんだ。

……この、『アダマン洞窟』で…

？

私とフィルちゃん（口に出すと怒るけど）がまだレベルが八十に入ったばかりのころ私たちは事あるごとにある洞窟に来ていた。偶然フィルちゃんが見つけたという洞窟に。名前はまだ地図がが見つかっていないため正式名称はわからない。だからフィルちゃんがここでとれる鉱石から『アダマン洞窟』と名付けた。なんといいネーミングセンスだろう
でも何回もここに来るとさすがに飽きてくる。もうもぐり始めて一週間は立っているだろう（現実で）だからこっちだと…４２日ほどか。
一か月ちょっとここだけにいることになる

「フィル～またここ～？」

「当たり前でしょ。だってここはまだ攻略組に知られていないけど現在手に入る鉱石系の素材の中では一番なんだからさ」

確かにそうだけどここはそれだけモンスターも強いわけで…
あ、あと私が語尾を伸ばすのには理由があったりするのだがそれはまだ言えない
むろんフィルちゃんにも

「何回死ねばいいのよ～」

そう。ここに来るたびに私は死んでいる。デスペナルティーでせっかく採った素材を落としてしまうと泣いてしまう。まぁフィルちゃんが分けてくれるからいいんだけど…

「ん？私は死んでないけど」

え？今なんて言った？フィルちゃんは死んでない？でも、レベルは私のほうが上だよ？まぁ確かに模擬戦では負けるけど…
だからってフィルは前線で闘っているから私よりも受けるダメージ量は多いはず

「だって、私……フィルの書使っているし」

フィルの書？
自分の名前のアイテムなんてあったっけ？
いや、ないはずだけど…あ！！
まだだれも作ったことのない道具を作ったら自分で名前を付けられるんだっけ？

「どんな効果なの～？」

「自分の最寄りの町へ転移する効果だよ」

それって市販で売っている『帰還の書』と同じ効果じゃない！！
めちゃくちゃ高いのに…
私だって何個か持っているけど攻略組の集まりの場でしか使わない
それぐらい高価なものなのだ
それと同じものを持っているのなら売ってほしい

「いくらで売ってくれますか～？」

さっそく値段交渉だ

「ん～？これ？最初だから９９個無料で上げるよ。これからは有料だけど」

そんなに！！

「ありがと～。でもこんなの持っていたんだったら先にいってよ～」

「聞かれなかったんだもん」

フィルちゃんはあまり関心がないようだ。
必要以上には語らず聞かないと教えてくれない。あの二つ名のことも……

「で、今何個たまった？」

ピッケル片手にフィルちゃんが聞く

「ん～と～あ、８個だって～」

アイテムボックスを開き言うとフィルちゃんは少し考える仕草をし

た。
その姿も髪の長さと『学者』の職業特有の服とが合わさって文学少女みたいだ。

「私は１４個でいま倉庫にあるのは７８個だから……二人の装備を一式作るためには２００は必要……あと１０８個。頑張ろう！！」

「え～そんなに～！？」

だってほかに人がいないから効率悪いんだもん。と頬を膨らませて言うフィルちゃん。
その姿は反則だよ～そんな姿されたら頑張らなきゃって思うじゃない

「じゃあ今回は私も帰還の書があるから奥まで行こうよ～」

「帰還の書じゃなくてフィルの書です～。でも、奥まで行くのは賛成だね。大体の洞窟は奥に行けばいくほどモンスターも強くなるけど採掘場所のレアドロップ率も上がるしね」

そういって奥へと足を運ぼうとする。
その時――

「そこにいるのは誰！？出てきなさい！！」

いきなりフィルちゃんが入口側の通路を見て声を上げた。
誰かが来たのだろう
ここに来たということはなかなかのレベルでありそして私たちのことを知っている可能性があるかもしれない人だ

「おやおや、気づいていましたか噂にたがわぬ『強運』ですね。フ

ィルさん。そして隣にいるのは『聖母』ですか。メンツとしては面白いですね。攻略組は他の人たちとはつるまないものですが…」

薄笑いを浮かべた表情を見ながら少しむっとする
こいつは『知将』のマーガ。攻略組の一人だ
レベルは７６。私よりも低い

攻略組には二つのグループがある。
一つは攻略組内でしか行動を共にしない組。この組は攻略組以外のプレイヤーをバカにしていることが多い。大半がこのグループに属するが攻略組のリーダー格であるグレイドルさんがそれを許さないため実際にみんなの前でいうことは少ない。まぁ陰であざわっらているのがわかるが……
もう一組は、グレイドルさんが属している初心者にも分け隔てなく接しみんなで仲良くプレイしている人たちだ。この人たちはギルドなんかも作り初心者にも優しく手伝ってあげている。

マーガは前者だ
むろん私は後者。ギルドには入っていないが…

「あんたには関係ないでしょ～それにフィルは二つ名も持ってます～」

「でも、５０レベちょっとじゃないですか。あの時も本当に強運だけで倒したのかどうか」

ふっと笑いながら言う。
フィルちゃんはマーガの姿を見ると別に気にした様子も無いようで一人採取に励んでいる

★

一人で倒したのかどうか
それはあるダンジョンでのボス戦を意味する。
攻略組全員で臨んだボス戦だが予想外に強くみんなが破れてしまった。
みんなの体力がなくなってきて帰還の書を使おうとすると使えないことに気づきここが『アイテム無効化空間』だとわかる。
あと少しなのにダメージを与えられない
あきらめて死を覚悟したときみんなはいきなりボスのもとへ魔法攻撃が飛んだことに驚き今までいなかったはずのプレイヤーがいることに気が付いた。
ほぼ、満タンの体力を持った女性プレイヤーは一人で黙々と次の呪文を唱えている。
その女性がフィルちゃんだ。
すでに大半の者が死んでいて私もあと一撃で死にそうな状態だったためなぜ満タンの状態でいるのか。攻略組にいない子がなぜいるのかと思った。
ボスはフィルちゃんに気が付くと咆哮を上げて走り寄って行った。
いそいで、フィルちゃんの名前とレベルを確認すると私はため息をついてしまった。あの子では倒せない。それよりも先にボスの攻撃でやられてしまうだろう。
レベルは中堅より少し上だが攻略組には及ばない。
近接戦闘職であればダメージを先に与えて倒せるかもだが詠唱に時間のかかる魔法職ではそうはいかない
あと一撃なのに…
とても歯がゆい。
身体にかかる擬似的な痛みと疲労により動けないのが
私はそう思いながら攻撃されるところを見ようとしていた。
しかし、急にフィルちゃんの詠唱が早くなった。詠唱は自分の練習

量のため早くすることもできるがこの詠唱の速さは異常だ
そしてボスの攻撃よりも一歩早く詠唱を終えたフィルちゃんは奥義
魔法を放ちボスを倒した。
爆風が吹き荒れる。
倒した。
それは自分に入ってくる経験値からもわかった。
私は……いや、私たち攻略組は突然の来訪者とその者によるボス撃
破という状況に唖然とした。

「お前名前は……フィルか。お前はなぜここにいる？」

「ふぅ……私は偶然ここに流れ着いてしまい……はぁ……でもいき
なりとても強いモンスターが出てきたので怖くなって物陰に隠れて
いたんです……ふぅ」

一番最初に我に帰ったグレイドルさんがいう
そしてところどころ息継ぎしながらフィルちゃんが言うのをきく

「いや……息整えてからでいいぞ」

「は、はい。はぁはぁ……ふぅ。大丈夫になりました。えっとそれ
でみんながやられてきてしまいこのままだといけないと思い一応攻
撃をしましたです。何か問題あったでしょうか？」

「いや……助かったからいいんだが…レベル低いのによくあんな大
技つかえたなぁ」

「いえ、魔力値におおく振り分けているので」

「なるほどなぁ」

「で、では私はこれで…」

いや、でもいくら魔力が高くても先程の詠唱スピードは異常だ。私以外には気づいてないようだけど…
フィルちゃんが立ち去ろうとするとグレイドルさんが呼び止めた

「ちょっと待てや……そうだ、お前の二つ名を考えたぞ。ぎりぎりで倒したから『強運』だ。運もきっとあるからな」

ちょっと安直すぎる気がするが……
まぁあの人だししょうがないか

しかし

「いえ、結構です」

(即答だ〜〜〜!!!)

きっぱりとフィルちゃんが言った
それに対してここにいた皆はそう思っただろう

「あっはっはっはっは気に入った。だからそんなこと言うなって…」

「いえ、では私は帰らせていただきます」

「い〜や。ここで逃げたらお前の二つ名は『強運』だぞ。なんせ俺が掲示板に書き込むからな」

グレイドルさん。それ脅迫ですよ。

「……わかりましたよ。私の二つ名はそれでいいです。」

では。と小さくため息をつき出て行った。

これが二つ名の理由と私とフィルちゃんの出会いでもあった。向こうは知らないかもだけど

★

「そんなのグレイドルさんに聞けばいいでしょ」

「あの人の言うことは私も信じていますから本当だということは認めますよ。しかしそこまで強いとは思えないのですが……まぁ強運だから強さは関係ないのですかね」

いちいち癇に障るやつだなぁ

私はこいつとはあまり話したことなかったけど一気に嫌いになった

「あ、あなたたちもしかしてアダマンティウム集めているのですか？」

「そうですけど…」

なぜわかった!!

ってまぁここで採掘するっていったらそれしかないか

「何個欲しいんですか？」

「……百個」

あ、フィルちゃんがしゃべった。

「どうぞ」

私のもとにトレード申請が来る
不思議に思いながら受諾すると鉱石が送られてきた

「百個も！！なぜ！？」

「私にはもう必要ないので」

「ありがとうございます」

「では、私はこれで」

そういって立ち去って行った。
何でも知っているようでむかつくがそれが知将と呼ばれるゆえんだろう

「まりあ、帰ろうか」

「そ、そうだね」

そういってその日は帰って行ったんだ。

？

あいつのこと思い出すだけでムカついてくる～～

でも、なんでフィルちゃんはあいつのギルドに入ったんだろう
まぁ昔に比べて丸くなったのは認めるけど…

そういえばここも昔に比べて楽に狩れるようになった。
人も増えてきたし道具も高いのに買いかえることですぐに必要量集めることもできた。
帰還の書もいまでは安い部類に入るし……

頭も冷えたから私は帰ることにする
ここによこしたのはフィルちゃんが考えてのことだろう
全く、私はあの子には頭が上がらない
だからこそいつもそばにいて助けてあげたい。

第十一話　出会い（後書き）

どうだったでしょうか？

今回ここでは皆様から着た質問についてお答えしたいと思います！！

まず、まりあが使っていた奥義をフィルが使ってえないといっていたはずなのに使っているという点について

まず、使えないといってません
あれ程の威力があるのはそんなにないといっていただけです

また威力に関してはまりあの方が上です
威力は魔力値にもよるので

だから威力ではまりあほどのはないというだけであって使えます
まぁスキルマスターですから（笑）

フィルの本名

秘密です

奥義を使っているときにジョブチェンジをいちいちしているのか？

していません
一度覚えたスキルは忘れないのでそのままの状態で発動条件さえみたしていれば使えます（両手剣装備など）

とまぁ今回はこの三つが多くあげられたので書いておきました。

他にも何かあったら聞いてきて下さい！！

感想待ってます！！

それでは

第十二話　夢と現実（前書き）

更新遅れてすみません！！

活動報告にも書いたのですが交通事故にあってしまって一か月ほど何もできなくて……

今回新キャラ登場です！！

キャラは少ないほうがいいという意見をリアルでもらい（友人一人にばれました）
それでもという感じで作ったキャラです。
まぁぶっちゃけその友人を基にしていたり……
性格はかなり違うけど……

今回は題名はあれですがそんなに重くないので気軽に読んでいたらければと思います！！

第十二話　夢と現実

「持ってきたよ～」

「時間かかったわね」

今はここに入ってから六日目
今回ログインできる日の最終日だ。

「いや～たくさん採ってきちゃったよ～」

「じゃあ～そこの材料入れに入れておいて」

まりあが材料入れにアダマンティウムを入れる
まぁ自分のボックスを開き数を指定して移動するという簡単な作業
なのだが……

「あれ～？でも～使うんじゃなかったの～？」

「いや～来るのが遅すぎてほかの上位素材で済ましちゃった」

「でもいいので来たの～？」

勿体つけて言うことにする

「とびっきりのが！！」

「え～？それって～？」

「そうさ!!『スパールジェントウェポン』が!!」

『スパールジェントウェポン』これはネーミングセンスはあれだがこのゲーム内のスーパー装備だろうこの装備の面白いところは持ち主のレベルアップとともに武器の威力も強くなる装備だ。だからレベル制限も無いし、しかも威力も強いといういいこと尽くめなのだ。

しか～し!!（↑ここ強調!）この装備は一般には売られていない。作るしかないのだ

作るにも、これは運だけなため何回も何回も作るしかない確率は１／１００だ

「いいな～!!」

「しかも二人分!!」

「わ～!!」

「ってことで今回はそろそろ落ちますか」

「早くない～?」

確かにまだ、六日目の朝になったばかりだ。少し早いかもしれないけど今週の目的は達成したから別にいいんだが……

「フィルちゃん行っちゃうんですか?」

「あ、うん。でもまたすぐに会いに行くから」

そうだ、ルネは私たちが落ちると（現実に帰ると）一人になってしまうらしいのだ
私たちがいない間も生活し続けるらしい。まぁ休眠モードを使っているらしいけど

「ねぇねぇ～遊ぼうよ～」

「何して？」

「私も混ざれるやつが良いです！！」

「三人でか～」

何となく窓のほうへ移動する。
すると、うちの前でおろおろと入ろうか悩んでいる奴がいた。
あいつは……ヒロキか

「ねぇヒロキがいるから落ちていい？」

「え～ヒロキ君～？別に中に入れてあげればいいじゃん～」

♪チリンチリ～ン♪

「あ、来た…」

「ほら～店長さん行かなきゃ～今は受付設定してないんでしょう～」

「フィルちゃん行きましょ～」

ルネがせかしてくるため仕方なく移動する

「はいは～い。いますよ～」

階段を下りると先程外にいたヒロキがいた。
あたりをキョロキョロしているところが少しうざい
せっかく顔はいいんだし（まぁ設定で作るから当たり前か）強いんだから（攻略組である）もっとしゃきっとしていればいいのにと思う

「あ、フィル」

「いや、たしかここにゴルゴンゾーラが売っていたと思うのだけど」

そうだった。こいつは毎回掲示板でお勧めしたものを買うというスキルマスターの信者みたいなやつなのだ

あの掲示板を観覧する一般のプレイヤーも多く私が毎回おすすめする道具を探し回る人も多いと聞く

その一人がヒロキだ。
まぁこいつは攻略組だから観覧だけでなく中に入って話すこともできるのだがあまり入ったりはしない

「……何個欲しいの？」

「じゃあ、５個」

気弱気に言う。でもこいつは戦闘では本当に強い。
戦闘職である『モンク』なのだから攻撃力の大さは認めるがそれ以外にも戦い方がうまい。

『モンク』という職業は、攻撃力の大さと魔法の代わりのスキルに『気功術』があるのが特徴だ。
攻撃力だけでいえばヘブンヘルズの中で2位か3位に入るだろう。
気功術には自己を強化する物が多く相手に攻撃するようなのはあまりない

で、ヒロキの戦い方がうまいというのは気功術による強化の時間の短さ（強化中はＭＰを消費し続ける）
一瞬で判断しその後の思い切りの良さがずば抜けているためだ
私とは違った戦い方をするためよく学ばせてもらっている。
私の戦い方は……今はまだ秘密にしておこう。
もったいぶっているのではなくうまく説明できないというのが理由の大半だが……

私があきれ顔でヒロキを見ているとヒロキはこちらが見ていることに気づき首をかしげた

「てかあんた6日間これ探していたわけ？」

「え？いや……ダンジョンに潜ったりしていたけど。ただ思い出して」

「ああ～スキルマスターの残した言葉か～いや～光栄だね。私の店の商品が紹介されるなんて」

「ホントすごいと思うよフィルは。これで何回目だっけ？」

「そんなの覚えてないよ～」

私は基本的に戦闘時以外のヒロキが苦手なため、まりあのまねをし

て対応する（いわゆるテキトーに）

「でも、物作りに関してはフィルが一番だと思うよ。物作りだけでそのレベルになるところなんかも」

とても面白い勘違いをしてくれているようだ

確かに私がスキルマスターということは知らせてないし戦闘しているところも見せたことないが……

何も物作りだけでレベルがポンポン上がるわけないじゃないですか（笑）

バトルが大半ですよ！！

しかし私はここであえて肯定する！！

「うん！！ヒロキみたいに素材を持ってきてくれる人がいるからね」

「いや、俺は別に自分の武具さえ作れればほかの材料はいらないから」

ヒロキも私と同じように自分で武具を作っている

この手の人は意外と多いしそれぞれ顧客を持っていたりする

私の場合はまりあとか……

ヒロキに材料を受け渡しをする

「ありがとう。フィルのお店のこと攻略組の人たちにも伝えておくよ」

「結構知っている人いるけどね。誰かのせいで」

誰かとは今うちで退屈している人のことだ

ヒロキが出て行ったのを確認するとアラームの音がしてきた
これは私が設定機能で設定しているアラームのためほかの人たちには聞こえない
強制ログアウトまで残り３０分の合図だ。
強制ログアウトとは名前の通り強制的にヘブンヘルズから現実に戻る時間だがこれにはペナルティーが科せられる。なぜならばたとえ負けるような戦闘中であっても戻ってしまうからだ
自らログアウトするときには町か村のような安全な場所でするのが普通だ。
なぜならばログアウト時に一時的なフリーズタイムがあるからだ。
この間に魔物に殺されたら……考えたくもない！！
ちなみに5分前になると嫌でも皆にアラームが行くようになっている

「まりあ～私もう寝るから」

「あ～おかえり～帰ってきてもう寝ちゃうの～」

「１Ｆにいただけだしあと３０分無いから」

「う～わかった～私はまだ残るからルネちゃんと遊んでる～」

「……もし変なことしたら殺すわよ」

もしも次来た時に私が作ったもの以外の服をルネが来ていたりしたら！！

その時は容赦なくまりあを即死させてあげなければ

「私は大丈夫です。おやすみなさいフィルちゃん」
「間違ってもその服は脱がないようにね」
「わかってるわよ～そんなことしないってば～」
「私もフィルちゃんが作ってくれる服は大好きなので脱ぎません」
ならよかった。内心自分の趣味が相手に伝わるか心配だったんだけど
「じゃあね」
一言を残し私は自分の部屋へと入りベッドで横になる
そうしたほうがログインした後に体と頭がついてきやすいのだ
「ログアウト」
ピッ
ボタンを押してフリーズタイムが終わるのを待つ
一瞬光が視界を覆う
ピピピピピ
鳴り響くのはアラームではなく現実の目覚まし時計の音
ベッドからゆっくりと上体を起こし鏡で自分の姿を見る
もちろんそこには先程まで来ていた服とは違いパジャマを着た自分の姿がある
寝癖を手櫛でときながらもう片方の手で制服を取り出す
これを着るたび思うがやはりヘブンヘルズも好きだがこちらの世界

もいいと感じる
こちらにあるもののすべてがむこうに存在しなおかつ魔法などもあるが
私はこちらも好きだ。
ヘブンヘルズでスキルマスターとなり神とあがめられようともそれでもこっちには温かい家族と数は少ないが信頼のおける友達がいるこちらもいい

今日という日をカレンダーで確認しそこにハートの印と『下の子たちの誕生日』と書かれているのを見て軽く笑みを漏らす

そういえば今日の夜からはあの子たちと一緒なんだ

向こうでの生活ももっと楽しくなりそうだ
あの子たち二人が私の周りで冒険してくれるなら……
まぁそれよりもまずはこっちの生活を楽しまなければ
机に置いてある小さな小箱を二つ手に持ちながら私は階段を下りた

第十二話　夢と現実（後書き）

……まだ続きますよ？

序章が終わった感じですからね？

ただ大体のキャラ紹介が終わった感じですから！！

……すいません。変な終わり方で

次回は現実のほうでの話です。現実のほうもしっかりあることを皆さんにわかってもらわなければ！！

一生ヘブンヘルズってわけではないということを！！

と、一人息巻いていますが久しぶりにこのサイトを見て驚いたことが一つあります

お気に入り件数が倍ぐらい上がっている！！

入院前は４０あるかないかだったのに今は７１件！！

この二か月の間に何があったのか！？

謎です。でも嬉しいです！！

まだ、座っているのも最高二時間が限度で更新が少し遅れるかもしれませんが（このままだと学校に行くことができない……（汗）呼んでくださるとうれしいです！！

また、感想やご指摘いただけるともっと嬉しいです！！

お気に入り件数に合わせて感想の数も期待しながら待ってます！！

（書きながらですよ？）

ではまた次回～

登場人物紹介

今回は今まで出てきたキャラクターの紹介です
なぜかというと次回から新章に入りたいと思うからです！！
と、いうことで一人目！！
主人公のフィル！！
一回後書きでも書きましたが今度はもっと詳しく
そこからはどんどんいっちゃいますよ～

ユーザー名　フィル
本名　？？？
二つ名　表　強運
　　裏　スキルマスター
ジョブ　一次職　魔法剣士
　　二次職　職人
使い魔　ルネ
レベル　１５７
所属ギルド　フェリアス

コンプリートスキル　７４

コンプリートジョブ　見習い剣士　見習い魔道士　戦士　神職　忍者　魔法剣士　薬剤師　鍛冶師　調合師　職人……ｅｔｃ

容姿　ヘブンヘルズ）顔は少し目が丸くて顔も細め茶色の髪は腰まで伸びている
背を少し高く胸は控えめの１７歳位に見える。（本人談）
コンピュータでは平凡と言われている

現実）髪の長さといろは上記と一緒
しかし見た目は普通で一言でいうと平凡そして『目立たない』
それが嫌で上記のように変えてみたが結局変わらなかった……ｏｒｚ

性格　目立たないため人と話すことが少ない。よって何事もさばさばした感じ
しかし、ゲームは大好きであり知識的には重度のオタク
本人は目立ちたいと思っている
また、人によって感情の起伏が激しく、
仲のいい人とは良く話すが悪い人とはあまり話さないｏｒ無口

備考　スキルマスターと呼ばれるのはうれしいがあまり正体を言わない
理由はそこからユニーク職業のこととともう一つの大きな理由を知られないため
スキルマスターたる所以（ゆえん）は常日頃からスキルをためることに

没頭しているからだ
　ルネとはかなり前からの仲で親密度は最高。使い魔を道具と思っている人もいる中ルネのことは友達だと思っている。
　自分の拠点であり店でもある『ヴィース』は路地裏というため目立たなかったことに共感して購入
　あまり人が来ることはないがここでしか売っていないものが多々ある
　一次職の魔法剣士は何となくであり『転機の書』によってころころ変えてしまう
　二次職の職人では物づくりのためとスキルをためるためという理由でなっているが、たまったら何になるかは検討中

名前　ルネ

モンスター名　プリンセスフェアリー

種族　フェアリー

飼い主　フィル

ジョブ　狩人（新密度　ｍａｘ）

レベル　１０４

容姿　小さい。そしてとてつもなくかわいいのがフェアリーである
　姿に若干の違いはあるがあまり変わらない。ルネとほかとの大きな違いは性格であり他のフェアリーは人間を避けるのに対しルネはきれいな金髪をなびかせながら人と打ち解けていく

性格・備考　フィルとの出会いはルネが狩られそうになっていたところをルネが助けたことによるもの
　その後使い魔契約を行い使い魔となった。
　フィルとの仲は最高であり仕える・られるの関係ではなくよき姉妹のような関係である
　ルネのもとであるフェアリーは存在個体数が少なくしかし素材は高く売れることからよく狩られている。また、その中でも一番珍しいのがプリンセスフェアリーである
　フィルの以外のプレイヤーともすぐに打ち解けることができまりあとも仲が良い

ユーザー名　まりあ

本名　???

二つ名　聖母

ジョブ　一次職　賢者
　　二次職　神職

レベル　１７９

使い魔　???

所属ギルド　フェリアス

コンプリートスキル　２１

コンプリートジョブ　見習い魔道士　ウィザード　神職　僧侶

容姿　ながくすらっと伸びた黒髪に青色の目、ふっくらとした胸
　　優しそうな雰囲気が漂っている。さながら見た目は日本人のマリア様

性格　毎回語尾を『～』で伸ばすのが特徴。このしゃべり方はネット内のチャットでも共通している
　とても優しくなぜなのかわからないかフィルの存在感のなさもものともしない。
　また顔が広く様々な人と仲がいい（一部例外を除く）

備考　二次職を神職から変えない。またジョブは魔法系が多く回復系にたけている
　そこから聖母という二つ名がついた。フィルのことを溺愛しており自分の妹のようだと思っている
　　使い魔との仲は良好だがあまり一緒にいることはない

ユーザー名　ギルバート

本名　???

二つ名　鬼神

ジョブ　一次職　双剣使い
　　二次職　鍛冶師

レベル　１８７

使い魔　なし

所属ギルド　なし

コンプリートスキル　１７

コンプリートジョブ　見習い剣士　剣士　双剣師　銃士　双銃士

容姿　黒髪に女顔。現実の姿をもとに作ったらしいため現実でも似ていると思われる
　筋肉は少なくすらっと伸びた高い背。顔のことをよく皆にからかわれるがもう慣れかけている

性格　クール。（自称）皆からは体のいいいじり役として思われている
　戦闘時においては強大な力を言わせる。双剣、双銃を扱わせると右に出る者はいないという

備考　βテスター
　自分の者は自分で作る。自給自足精神の持ち主
　愛剣『フラン』と『ベージュ』は低レベルからの友
　使い魔はあまり欲しいと思ったことはないが他人の使い魔とはよく話す

ユーザー名　ヒロキ

本名　ひろき

二つ名　静なる拳

ジョブ　一次職　モンク
　　二次職　僧侶

レベル　１６８

使い魔　ウィンディーネ（アル）

所属ギルド　ミルストラル（所属員一人…）

コンプリートスキル　２１

コンプリートジョブ　見習い剣士　剣士　ファイター　モンク　修行僧　武闘家　僧侶

容姿　気弱な雰囲気を漂わせている長身。背の高いことを生かした戦い方をする
　姿自体は現実のままの者と思われ実はフィルのクラスメイト

性格　戦闘時には頼りになるがそれ以外では気弱な残念な性格
　現実と同じ性格だが現実ではゲーマーのことを言ってない（ヘブンヘルズをプレイしている人にはばれているが）フィルが現実で同じクラスだということを知らない

備考　優等生。しかしおどおどしている
　実はロボットアニメ好き↑どーでもいい

以上主要人物です

これからはこの四人＋一で頑張っていきたいと思います！！

――

以下サブ

グレイドル
ヘブンヘルズでの最高レベル者でβテスター『疾風必勝』のリーダー

クロイツ
疾風必勝の参謀役　βテスター

マーガ
フェリアスのリーダー　二つ名は『知将』

これで紹介終わりです！！
他にも何か詳しく知りたい！！って言うことがあれば感想にどしどし送ってください！！
すぐにお答えします！！少し世界観とかわかりにくかったりすると思うので…

第十三話　双子のお誕生日　私の生活（前書き）

遅くなってすみません桜川リマです
今回から新章突入！！
……ですが一話分の日常風景ともう一話のチャットは入れちゃいます

そのため一話で収めようとしたため長くなっちゃいました。
長いのと短いのどっちの法がいいのでしょうか？
そんなことを思いつつも
この物語が皆様を楽しませることができたら幸いです

でわどうぞ！！

第十三話　双子のお誕生日　私の生活

制服に着替えて下へと降りるとすでに家族がみんな揃っていた

「おはよう。優奈、美月お誕生日おめでとう」

『ありがとーお姉ちゃん』

「ん」

二人の頭をなでてからお母さんの手伝いに行く
匂いからして今日は和食らしい

「お母さん。お味噌汁のほうは私に任して」

「ありがとうねお姉ちゃん」

お母さんも私のことをお姉ちゃんと呼ぶ
私はいつものことのため大して気にすることもなくお味噌汁を作り始める
赤みそと白みそをうまく混ぜて作るオリジナルブレンドだ
素早くネギを刻み中に入れる
煮詰めながら大根とにんじんを短冊切りにしてすばやく入れる
本来なら順番が逆だが
ネギを早く入れたのには理由がある
優奈がネギがダメなためドロドロにしないといけないのだ

材料をすべて入れ終わると今度は半分に切った食パンを取り出しハニートーストを作る

和食の材料は４人分しかない
私の分がないのだ。
これは影が薄いから忘れられているのではなく私が朝はハニートーストしか食べられないからである

和食に限らず洋食でも私は食べない
朝からそんなに食べられないのだ
食べるほうがどうかしてると思う
食パン一枚でさえ食べられないっていうのに……

「はいご飯」

私が作ったお味噌汁とお母さんが作った焼き魚が食卓に並ぶ
私は作っている間に食べ終わっているのですぐに学校に行く準備をする
といっても玄関の前にあるバッグ片手に家を出るだけだが

「行ってきま～す」

『いってらっしゃ～い』

ドアを開けようとすると食卓から美月が出てきた

「あ、お姉ちゃん。」

「何？」

「今日は早く帰ってくるの？」

何を心配しているのかと思えば……

弟たちの誕生日に早く帰らない姉なんているだろうか？
まぁいつも受験勉強として図書室にいるから遅いのだけど

「うん。帰ってくるから。だってあなたたちのケーキ作らなきゃいけないでしょ」

昔からこの子達の誕生日ケーキを作るのは私の役目だ

「もしかしたら美月が帰ってくるよりも早く帰ってくるかもしれないわよ？私には部活ないし」

軽く美月の頭をなでながら言う
美月は笑顔になって頷いた。

「ほら、早く朝ごはん食べちゃいなさい。男の子なんだから大きくならないと」

「うん。じゃあ行ってらっしゃーい」

「行ってきます」

ドアを出るとすでに太陽が日差しを大きくしていた
日差しに目を細めながら慣れ親しんだ通学路を自転車で通る
通り過ぎる近所の人にあいさつをしながら２０分ほどこぐと学校が見えてくる

校門の前にいる先生にあいさつしてから自転車を駐輪場に止め教室に行く

「はろ～」

「あ、星羅。おはよう」

教室に入ると後ろのほうの席から挨拶が飛んできた
長い黒髪をポニーテールで結んでいる純日本人風の姿の女性が手を振っていた
志村星羅。現実で私の友達だ。ちなみに剣道の道場を実家がやっていて星羅もものすごく強い

「星羅。昨日の問題で少し聞きたいことが――いてっ……あ、おはよう」

星羅のほうに向かって歩いていると横から来た誰かにぶつかってしまった
あわててぶつかってしまった相手を見ると相手は男性だった
男性の名前は三枝弘樹（さえぐさひろき）
相手がわかった途端に私は笑顔に挨拶する
こいつはヘブンヘルズにおける『ヒロキ』である

「あ、ゴメン。・・・・・おはよう」

「弘樹君も今登校？」

「うん。ちょっと寝過ごしちゃって」

弘樹は少し苦笑いをしながら私達の会話に加わろうとする
ちなみにヒロキは私がフィルだということも知らない
私が知っているのはヒロキが現実と同じ姿を使っているからだ
あとこちらでの間柄は喧嘩とか嫌がったりせず良好だ
別にヒロキはおどおどなんてしてないし

まぁ私よりも頭がいいのがむかつくが
星羅と私、ヒロキを加えた3人はヘブンヘルズをやっている中だと
いうことでとても仲がいい

「弘樹君てヘブンヘルズやってるんでしょう？」

「ああ。弱いけどね。星羅はどれくらいのレベルになったの？」

「うそつき攻略組の癖に。私なんてまだ67だよ～」

「まだ始めて半年もたってないのに67だなんてすごいじゃないか」

星羅は急にこちらを向き肩を両腕でつかんできた

「な、なに？」

「アンタは何レベなのよ～ユーザー名教えなさい！！」

「私は非戦闘人だからレベル低いんだって。それにいえるような名
前じゃないから」

「俺もきになるんだけどな～」

「無理無理恥ずかしくて死んじゃうから！！」

確かに恥ずかしいな
スキルマスターだとわかるのとフィルだということがわかるのは恥
ずかしい
これでも二つ名持ちは少し有名なのだ

「ほら！！チャイムなるからもう座ろう」

私は顔を赤くして言う
向こうでは感情が乏しいように思われているがこちらでは友達の前では他の人と変わらないと思う
まぁほかの人だと無表情らしいが

授業もしっかりと受け昼食の時間
うちの中学校は給食のため手早く配ぜんする

食べるメンバーは、先ほどの三人に平井健人の一人加えた４人で食べる

食事時の話題はもちろんヘブンヘルズについてだ。
健人はまだ初めて３週間なため私たちの話を聞いて勉強してるらしい

「星羅さんはユーザー名何なのですか？」

「さんはいらないって健人。私のユーザーネームは『☆（スターライン）ライン』星の道っていみね
何のひねりもないけどこれでも結構悩んでつけた名前なんだ」

「いい名前じゃないか俺なんてそのまま『ヒロキ』だぞ」

「一番面白いのを付けたのは健人でしょ」

「あれはふざけてるしかわからない……ぷっ」

「確かに……ぷぷっ」

「僕の感性を笑わないでください！！いいじゃにゃいですか『Ｏ@Ｏ〈俺の嫁?』」

「絵文字をユーザー名にするな！！」

「ユーザー名を教えない誰かよりはましだと思いますよ！！あぁ僕も反省してますが……あとで変えられるかと思ってやったのに…」

ヘブンヘルズには課金アイテムがないためリネーム機能を持ったアイテムもない
・・・今のところは
と、言うのはもしかしたら作り出せる可能性があるからだ。
まだヘブンヘルズでは発見されていないものやダンジョンがあると言われている。
そして増えてもいっている

「名前の件は置いといて、みんなの尊敬する人って誰?」

「逃げたわね。私は同じ『テイマー』で攻略組にいる魅惑の二つ名を持つシルクさんね」

「俺はもちろんスキルマスターかなぁ」

「僕は攻略組ではないけど『詩人』で敬愛の二つ名を持つセリム様ですかね」

「ああ、新人の人に優しくものを教えてあげるって言う人か。私は話した事ないわ」

「私はあるよ。初めて話した人だから。一緒にパーティー組んだ事

もある」

「俺もないな。初めたの早かったし」

「言い出しっぺのあんたは誰なのよ」

「私？私は・・・・・・『ネクロマンサー』で攻略組にいる死霊の二つ名を持つレイシスちゃんかな」

「あんた趣味悪！！」

まぁ、無口で無愛想で知られてるからね

「レイシスとは俺も話した事ないな」

「レイシスちゃんはまだ小学生なのに攻略組にいるんだよ！すごくない！？私、妹たちがレイシスちゃんと現実で友達だから会った事あるけど、姿もヘブンヘルズと同じで可愛いの！！」

「へェ～意外と近くにいたんだ～」

「今度クエストの時に話しかけてみようかな？」

レイシスちゃんは私の事知ってるんだよね～もっともスキルマスターとまでは知られてないと思うけど
向こうであった時にすぐにばれちゃった

私たちがレイシスの話題で盛り上がっていると一人会話に加われなかった健人が気まずそうにして聞いてきた

「レイシスって誰なんですか？」

「ああそっか。レイシスは俺たち攻略組でもあまり知られてないからお前が知らなくて当然か
レイシスはネクロマンサーで悪魔をたくさん使役しているちっちゃな女の子だ。ただ、中に入って倒したモンスターをどんどん呼び戻していくのを見て二つ名が死霊。あとあまり話さないんだよな」

「見た目は長いきれいな金髪で青い目、可愛い服に……確かゴスロリっていうのかな？それに何かしらの動物の死体のぬいぐるみを持っているの。現実でも姿は変わらないわ。何でもハーフらしいわよ。性格はもう少し話す方かな？あ、あと名前はヒロキと同じように本名」

もう可愛すぎるの！！あの子はうちの子たちと話していると笑ったりするし怒ったりもする。やっぱり普通の女の子だ

「なるほど、で、なんで尊敬するんですか？聞いていると他の人には気味悪がられていたり無愛想だと思われているようですが」

それは…あの子がとても優しいからだ

「あの子がどうしてネクロマンサーになったか知ってる？あの子はまだヘブンヘルズでやり残したことがあると思っているモンスターだけを復活させるの。しかも攻撃力倍加で守備力少し減少の『皮膚無し』状態で戻すんじゃなくて。大体の人はそれを使って再生させるのに完全体で復活させるんだよ。未練をなくならせてあげるために」

その優しさに心を打たれたのだ。

私は向こうのモンスターは所詮プログラムだと思っていたからそんなこと考えたことも無かった

「へぇ～優しいのね」

「そんな子だっただなんて……」

「うん。話さないのは人見知りなだけだから話しかけてあげて」

そんなことを話している間に予鈴が鳴る
それから各自席に戻って午後の授業を受ける。
私は今日作るケーキの材料を書きだしておく
ＨＲの終わりとともにみんなの誘いを断って買い出しに行くために教室を出た

うちに帰ってきてケーキを作り始める
親は両親ともに共働きなため帰りは遅いため私一人だ

『ただいま～』

「おじゃまします」

ケーキを焼いていると美月たちが帰ってきたようだ
今日は一人友達を連れて帰ってきている。うちでやるパーティーに呼んだらしい
台布巾で手を拭きみんなを迎えに行く

「おかえりなさい。いらっしゃいレイシスちゃん」

「お姉ちゃん。今日はチョコケーキなの？」

「あ、匂いでわかった？優奈の好きなチョコケーキだよ」

「そういえば去年は僕の好きなチーズケーキだったもんね」

「レイシスちゃんはチョコ大丈夫？」

「はい。今日から二人ともヘブンヘルズでご一緒できると聞いて」

「そうだよーレイちゃんに始め一緒にプレイしてもらう約束なの」

「レイシスは攻略組だから初期装備だってどこでも行けちゃうよな」

はしゃぐ双子

それにレイシスちゃんはちょっと困った顔をする

「こーら。レイシスちゃんがいるからってどこでも行けるわけじゃないのよ。それに私からのプレゼント忘れてないかしら？」

「お姉ちゃん装備くれるんだっけ？」

「確かスパールなんとか！！強いんだよね！！」

「スパールジェントウェポンね。しっかり作ったわよ」

それを聞いてまたはしゃぎだす二人

走って二階の自分の部屋へ行ってしまう

レイシスちゃんを置いて…

「あの、お姉さん」

「なーに？」

「今日はお夕食をご一緒させてもらってもよいのでしょうか？」

「気にしない気にしない。呼んだのはあの子たちでしょ。だったら大歓迎だよ」

「ありがとうございます。あと一つのお願いしたいことがあるのですが」

「何でも言ってよ。レイシスちゃんの言うことだったら何でもかなえちゃうよ？もしかしてヘブンヘルズのほうかな？」

「はい。私の装備がそろそろ壊れてきちゃったので新しいのがほしくて……よろしいでしょうか？」

「任せといて。二人のところそろそろ行ってあげてよ。待ってると思うから。あと今日はよろしくね」

「はい。私のほうこそよろしくお願いします」

今日はレイシスちゃんとともに双子の初心者研修を行うことになっている
そのあとはレイシスちゃんの家訪問＆私の家訪問だ

レイシスちゃんが二階に行ったのを見届けてからケーキの焼き加減を確認しに台所に向かう

ケーキが焼きあがったのを見てデコレーションをする
チーズ味のホイップクリームをきれいに乗せプレートにチョコで『お誕生日おめでとう優奈、美月』とかく
あとは食べるまで冷やしておけば完成だ

夕食まで下の子たちとともに遊びヘブンヘルズについて大まかな説明をしておく
お母さんが帰ってきたら一緒に夕食を作り始める
皆で夕食、ケーキを食べレイシスちゃんをお父さんが送り届ける

ここまで夜の九時

十時から入れるように双子を風呂に入れパソコンを立ち上げる
攻略組のチャットに顔を出してから私もお風呂に入る

九時五十分
私は部屋の中で寝る準備をする
三人分の布団を引き少し待つ
するとノックをする音が聞こえる

「はいっていいわよ」

『お姉ちゃん一緒に寝よ』

貰ったばかりの札と枕を持った双子を招き入れる
何かのお祝い事の時は三人で寝るのがいつもだ

今日の冒険では何が起きるのだろう?そんなことを考えながら二人の頭をなでながら眠った

第十三話　双子のお誕生日　私の生活（後書き）

新章アトランティカ編突入！！
大体二十話を目安にしてますがもっと長くなる可能性大です
感想でも多かった長編を書く予定なので…

感想、誤字の指摘いただけると創作意欲が数倍に跳ね上がります！！
必ず返信をするようにしていますのでぜひ送ってください！！

最後にフィルから一言！！

フィル「この小説を読んでいるヒロキと名のつくものは全員感想を送ってくるよーに！！」

感想待ってまーす！！

第十四話　チャットルーム２（前書き）

どうも桜川リマです！！

祝！！お気に入り件数８０件越え！！

１４話で８０件は遅いかもしれませんが嬉しいです！！
お気に入り登録してくださった皆様方ありがとうございます！！

欲を言えば感想が来ないということですがそれでもお気に入り登録していただけるだけでうれしいです！！

今回は現実とヘブンヘルズをつなぐ話でチャットルームとなります
今回の長編の名前の意味が分かるようになっていますので読んでいただけると嬉しいです！！

第十四話　チャットルーム2

チャットルーム【ヘブンヘルズ攻略組情報交換ルーム】

現在の人数　７／３８

※注　この場所はゲーム《ヘブンヘルズ》の攻略組（ゲームの一足先を行く人たち）の掲示板です。　攻略組でない人は、はっきし言って邪魔になるので参加しないようにしてください。　また、デスペナが怖い人はここに来ることをお勧めしません。　ここでは、何か新発見があった時に命を捨てる覚悟で未知の領域に入っていく覚悟がないといけません。　まぁぶっちゃけ臆病者は去れってことです。　（ここのパスワードは攻略組しか知らないと思いますが…この注意書きはうっかり知ってしまった人のためです。）ｂｙ管理人クロイツ

クロイツ「皆さん管理人のクロイツです。　何か最新情報あったらどんどんレスください！！」

シルク「まりあさんのダンジョンクリアされたそうですよ」

クロイツ「知ってます。何でもまたスキルマスターさんのおかげだとか」

グレイドル「ああ、そうみたいだぜ。何でもゴーレムがキーモンスターだったとか」

レイシス「あいかわらず謎な人です」

クロイツ「お！！レイシスさんいたんですか！！会えてうれしいです」

レイシス「ロリコン嫌い」

クロイツ「ぐはっ」

グレイドル「謎でいうんだったらレイシスお前もだからな」

ヒロキ「確かに！！（笑）」

ギル「謎でいうんだったらヒロキも戦闘時と平常時の変わり方が不思議だぞ」

まりあ「ｗｗ～」

クロイツ「おお～今日はヒロキさんとギルバートさんまで！！めったに来ない人が多いですね～」

ヒロキ「そういえばリアルで誰が一番尊敬できるかっていう話があったんですよ」

レイシス「面白そう」

ギル「少し気になるかな？」

ヒロキ「３人に聞いたところ一人がシルクさんでもう一人がレイシスちゃんラストが攻略組じゃないセリム君」

シルク「ほ、ほんとですか～テイマーの人でしょうか～」

ヒロキ「そうですよ」

――――10分後――――

ギル「……」

まりあ「もしかして～みんな呼ばれると思っていたり～？」

グレイドル「だって俺は攻略組トップに立つ男だぞ！！」

クロイツ「いやいや知識の量でいったら私でしょう」

グレイドル「ざけんなクロイツ！！俺はリーダーだぞ！！俺のほうが人気あるはずだ！！」

クロイツ「しかし！！トップギルドである疾風必勝の実権を握ってんのは私ですよ！！」

ギル「あっ！！別に俺は選ばれるとか思ってなかったからな！！」

シルク「ふふっ。このやり取りを見ていると半年前の人気投票を思いだしますね」

まりあ「ああ～クロイツが向こうでが行ったイベントですね～一位はスキルマスターでしたよね～」

レイシス「私はランクインしなかった」

シルク「まぁ仕方ありませんよ。レイシスさんはイベントの少し前

に攻略組に入ったんですから」

ヒロキ「あの～俺から話し振っておいてなんですがそろそろ時間なので情報のやり取りをしませんか？」

シルク「私は特にないですね。ただ私の水系のモンスターが騒がしいってことでしょうか」

ヒロキ「今回来た理由の一つなのですが俺のウィンディーネのアルが新ダンジョンを見つけたんですよね。水中で」

ギル「水中！？」

グレイドル「どこら辺にあるんだ？それでどれくらいのダンジョンなんだ？」

クロイツ「陸の近くなら楽ですが沖に出ると泳ぎスキルが５０００／１０００００は必要ですよ。それに大きすぎると息が持たなくて死んでしまいます」

シルク「使い魔に任せるダンジョンでしょうか？」

レイシス「それはクリアーしたかどうかがわかりにくいから厄介」

ヒロキ「大きさは不明ですが距離はエスカリア大陸の北部の沖合ですね」

まりあ「エスカリア大陸は～……確か最初に始まる独立国フェリアスがあるところですね～」

ギル「俺はいいけないな。泳ぎスキルが足りない」

まりあ「私も～」

シルク「泳ぎスキルがなくても使い魔の力を使えば行けますよ。まあ水系じゃないといけませんが」

レイシス「私は大丈夫」

グレイドル「俺だって行けるぜ！！海で体鍛えた時期があったからな」

クロイツ「久々に私も行きますか。あと、いけない人ももしダンジョンの途中が陸地だったらパーティーの呼び寄せ効果で呼び出せますよ。まぁリーダーが泳げないといけませんが」

スキルマスターさんが入室しました。

まりあ「こんばんは～（＾－＾）」

スキルマスター「こんばんはまりあさん。そのダンジョン今までにないタイプで面白そうですね」

スキルマスター「幸い私も泳ぎスキルはｍａｘなので参加させていただきたいと思います」

ギル「まじかよ」

スキルマスター「しかし私は今回遅れてしまうかもしれません。遅れずに行きたいと思うので皆さん頑張りましょうね」

スキルマスター「今回お勧めするのは二刀流スキル――二刀居合です。うまくコンボスキルとして使えると絶大な威力を発揮しますよ」

スキルマスターさんが退室しました。

グレイドル「まじかよ！！女だろスキルマスターって！！それで泳ぎスキルマックスとかどんだけだよ！！」

クロイツ「それは偏見ですよ」

シルク「私は足りないので子供にお願いするしかありません」

レイシス「私も」

クロイツ「そろそろ皆さん落ちましょうか」

グレイドル「だな」

レイシス「私もダンジョン行くの遅れる。友達と約束あるから」

シルク「では向こうでまた～」

グレイドルさんが退室しました。

シルクさんが退室しました。

クロイツさんが退室しました。

ギルさんが退室しました。

レイシスさんが退室しました。

ヒロキさんが退室しました。

まりあさんが退室しました。

第十四話　チャットルーム２（後書き）

次回からは向こうでの話になります。

初めてのヘブンヘルズでの優奈と美月の指導
今回出てきたコンボスキル
これらに重点を置いてやりたいと思います！！

感想が頂けると嬉しいです！！
やる気が上がります！！
今回お気に入り件数が８０件超えたので次の目標は感想増加とお気に入り登録１００件越え、ランキング入りです！！

感想一行でもいただけると嬉しいので送っていただけると幸いです！

ではまた次回！！

第十五話　戦闘の心得（前書き）

この頃早くに更新できていると自負している桜川リマです！！
一回の更新で約十件のお気に入り登録
このままいけば百件越えもすぐかな？

伸び悩んでいるのは感想

……感想ください

貰えるのともらえないのとでやる気が変わりますので

一行でもいただけたらすぐに返信いたします！！

修学旅行に行って京都で見つけた新商品その名も

（´・ω・`）ショボーン

可愛くてつい購入してしまいました金閣寺ショボーン
今では筆箱にくっついています

近況報告は置いといて、それでは本編どうぞ！！

第十五話　戦闘の心得

いつものようにログインしてヴィースで目覚める
リビングに行くと既にまりあとルネがいた

「おはよ～」

「おはようございます」

私は少し眠いので軽く手を上げてこたえる

「ねぇねぇ～いくんでしょ～海底ダンジョン～」

「今日は予定があるって言ったじゃん。急いで用意してフェルシスまで行かなきゃいけないんだから」

抱きついてくるまりあを払いのけフェルシスへ行く準備をする
双子にあげる装備一式は持ったしネクロマンサー用の素材も何個か持った
あとは私の店へのテレポート券。こんなもんか
あ、あと今日はコンボスキルを使いそうだから使いやすい『侍』にジョブチェンジしとくか

「予定って双子ちゃんのところか～」

「そう。だからそれが終わってから行く」

「わかった～じゃあ終わったらメールして～」

「わかった。ルネ！時間無いからテレポートで行くよ」

「はいです！！」

スキルであるテレポートを唱える
ここ、キェリルがあるケンビア諸島はフェルシスのあるエスカリア大陸からは結構離れているため飛行機かテレポートで行くしかないいつ双子が来るかわからないからフェルシスの広場へ急ぐ

目の前に現れる光る扉に駆け足で飛び込む
潜り抜けると人がたくさんいる場所に出た

「久しぶりのフェルシスだぁ～懐かしいな～」

この前来てから2か月は立っているだろう
この前来た時はあまりゆっくりできなかったが今回はゆっくりできると思う

まずは始めてきた人が集まる広場に行こう
そこに美月たちが来るはずだから

「あ、セリム君！！」

「ん？誰かの声がしたんだけど？」

あれ～？目の前にいるんだけどなぁ～？
こんなところで発動しちゃう？私の最悪スキル

「目の前だよ～」

「あ！！フィルさん。すいません！！」

「敬愛の二つ名を持つセリム君でも私のことは見つけられませんか」

「ホントにすみません！！僕は敬愛なんてされる人じゃないですよ」

「ふふっまぁそういうことにしておきましょう。私は用事があるのでこれで」

「はい、また今度」

簡単に話したのは敬愛の二つ名を持つセリム
とても優しい人で私が初めてここに来た時に話した人でもある
今は新人相手にやさしく教えてあげるということをしている
レベルも決して低いわけでなくたまにフレ登録をしている私とも狩りに行ったりしている

そろそろ来るころだと思うのだがまだ来ない
キャラ設定に手間取ってるのかな？
それとももう始めてたり……
そうだレイシスちゃんに聞いてみよう

フレンド設定を見てレイシスちゃんにメールを送る

『もう着いた？ついてたら広場前のカフェにいるから二人とも連れてきてくれる？』

そう送って私はカフェの前に行く
カフェでコーヒーとチーズをお願いする
チーズをルネと二人で食べていると3人が歩いてくるのがわかった

美月と優奈は姿を変えてないらしい
変えてないなら時間はかからないはずだからもしかしたら荷物運びのチュートリアルクエストは終わっているかも知れない

「二人ともどう？ヘブンヘルズは？」

「早く戦闘しにいこ～！！」

「もう美月ってばっ！！お姉ちゃんあとは戦闘クエストだけです！！」

「意外と二人とも呑み込みが早かったですよ」

二人とも私の質問には答えてないし…
でも聞いてる限りだと楽しんでいるのかな？
ま、いいや

「戦闘に行くんだったら装備、はい」

二人にトレードを申込み装備を一式送る

「一応全職業対応だけど美月のは双銃士、優奈のは時魔道士に特化した装備だから」

『ありがとう！！』

さっそく装備を付ける二人

「レイシスちゃんのはまだわからないからどの素材で作ってほしいか教えてくれるかな？」

「はい。あとでメールしておきますね」

「うん。じゃあ二人とも着おわったみたいだからまずは亜人の森に行くよ」

亜人の森は初心者用の森だ
動きの遅いゴブリンばかりだから狩りやすい

４人で移動して亜人の森の一角に行く
ここは初心者が好んで狩る場所なので人が多い
ちょうどよく2体のゴブリンが出てきたので
まずは二人に一体ずつからせる
私とレイシスちゃんは危なくなったら助けられるようにする

「えいやっ！！」

美月が持った剣で切りかかる
しかしゴブリンはあまりの大ぶりな攻撃なため余裕でかわし殴りかかる

「わっ！！」

驚いて美月は後ろに転んでしまった。
隣を見てみると優奈も魔法をうまくねらえずにゴブリンとは見当違いの方向にはなっている

「はぁ～初めてだから仕方ないとは思っていたけど……」

１０分ほどしてようやく一体ずつ倒した二人に私は軽くため息をつ

きお手本を見せることにする

「美月!!まず剣はそんな体全体を棒みたいにしてふっちゃダメ!!体を使うって言っても乱暴にじゃなくて足なら踏ん張りを利かして腰の軸を使って手できる!!あんたは野球をやってたんだからバットを使うのと同じ要領でやってごらん!!」

私は持っていた刀『夜月』で新しく出てきたゴブリンをわかりやすくゆっくりと切り倒す

「次に優奈!!魔法は相手を近づけさせちゃダメ!!弱い技で足元を狙ったり杖で飛ばしたりすること!!あと狙う場所はしっかり目で見る。集中が大事よ!!もし狙うのが苦手だったらこういうやり方もあるけどね」

といって私はゴブリンに向かって走りながら詠唱をする
目の前で魔法を発動させ相手に確実に当てる
これなら確実だがまぁソロ専用だろう。魔法職が前衛に出ると嫌われるから

私は倒し終わると二人のほうに向きなおす
二人とも呆然としていた。私がこんなに強いとは思わなかったのだろう
ここで一つ二人には種明かしをしてあげよう

「二人とも私が強いことに驚いてるけどこれでも二つ名持ちだからね?」

『ええ〜?』

ふふっ驚いてる驚いてる

「名前はフィル。強運のフィルって言われてるわ。まぁ攻略組ではないけど」

『知らなかった……』

「レイシスちゃんのは知っているとは思うけど死霊のレイシスって名前だよ」

「あんまり好きではないんですけどね」

「それは置いといて、二人とも倒すことに焦りすぎ。もっと相手をよく見て武器の特性も考えなきゃ。魔法だってたくさん撃っていたらＭＰが減るだけだし、近接系の職業だってスキルを使わなきゃ勝てない。だ・け・ど、スキルに頼らなくても勝てるように二人ともすること。ってことで今出てきたゴブリンを倒して」

話しているうちにまたゴブリンがわいてきたため二人で倒すように言う

今度は二人とも言ったようにやっている

美月は攻撃範囲の広い横なぎの攻撃で、優奈は初期魔法のファイアでしっかり狙って打っている

どちらも筋が良い。頭を使いながら攻撃している。

中でも優奈は魔法で目を狙ったり、攻撃しようとしているほうの手を魔法ではじいたりしている

「これくらいでいいかな？『十体ゴブリンを倒す』も終わったしチュートリアルクエストもあとは『スキルを使って戦闘』だけでしょ？」

「うん」

「やっと終わるんだ」

「二人ともがんばってるね。最後もがんばれ！！」

二人がゴブリンを何度かとしたところで話し出す
今から言うことは私がいつも思っていることだ
これを心にとめていたからスキルマスターになったのかもしれない

「いい？最後のスキルだけどいっとくことがあるの。スキルはこの世界で生きていくために一番大切なもの。使い方を間違えれば人に迷惑をかける。それに上手く使えないと自分がすぐに死ぬことになる。いい？」

『うん』

「スキルも強力なものになればなるほど隙も大きくなる。だからうまく組み合わせて使うことが大切。いい？『スキルは使えるだけじゃ半人前。扱わなくちゃダメ。自分が思っているように』いい？」

『うん』

今の説明でわかったのか？
正直うまく言えてるかわからないけど

「じゃあ……簡単に実戦で見せて見せるから」

私は鞘に刺さった剣のつかに手をかけもう片方の手をあやとりのひもを持って地面につける
形からすると居合の形をとって体制を低くしている変な人だ

「マ・デ・クリア・エル・デルタ『アースクエイク』！！」

まずは地面につけた手から奥にいるゴブリンを目指し魔法を発動させる
地面を伝ってゴブリンの下に大きな岩がせりあがる
ゴブリンが宙に浮く
それに間髪をいれずにあやとりでからめ捕る

「綾取り『口吸ひ』」

ひもを引きゴブリンを連れてくる

「居合術『五連閃』」

居合の形からの目に留まらないスピードの五連撃
ゴブリンが霧となってきえた

「どう？これが適材適所に応じて使うということ。アースクエイクは地面系の技だけど相手を飛ばすこともできる。『巫女』で覚えることができる綾取りスキルだって使えないと思っているけど口吸ひで飛んでいるモンスターを引き寄せることができる。最後に居合の間に相手が入らなきゃ使えない居合術だって呼び寄せれば確実に使える。これが扱うっていうこと。ＯＫ？『ただ技を使うだけじゃだめ。その技の長所と短所をうまく把握することが大事』なの。わかった？」

「す、すごい…」

「お姉ちゃんって強かったんだ…」

「攻略組じゃないのにお姉さん強すぎです…」

「ちなみに今使った技すべてが嫌われている技よ。その理由はレイシスちゃん分かる？」

「はい。アースクエイクは相手に当てる際相手が上に飛んでしまうから次の攻撃が狙いにくいという理由で。口吸ひは巫女スキルの中でも綾取りスキルが攻撃に適してないから。また、状態異常付与でえられる『チャーム』状態に相手がなりにくくならない場合自分への攻撃が怖いからという理由です。最後に五連閃はお姉さんが言ったように居合の間に入らなきゃ使えないからです」

「正解。わかった？嫌われている技も使いようにとっては使えるの。スキルを連続して使うことをコンボスキルと言って自分で名前を付けられるわ。ちなみに今のは私は口寄せ居合術って名付けているけどね」

「僕のスキルだとまだできないけど優奈のだったらできるね」

「美月のは少ないもんね。私のだとファイアとウォーターとサンダーが初期スキルであるからできるけど…」

「美月君は後から覚えるから焦らなくていいですよ」

「ありがとうレイシス」

「では二人に問題です。優奈の初期スキルでコンボスキルを効率よく出すにはどうすればいいでしょうか？」

「効率よくってことはもっともダメージを与えるにはってことだよね」

「僕分かった！！ウォーターの後にサンダーで威力上がるよ！！」

「正解。もう一つあるけど優奈、わかる？」

「ファイアからウォーター、ウォーターからファイアだと思う…」

自信なさ気にこたえる優奈
でもあっている
美月のよりも優奈が答えたほうがダメージは多きかったりする
一発だけじゃ相手にしっかり水がついているかわかりにくいから

「二人ともわかったみたいだね。私から言えるのはこれくらい。もうチュートリアルクエストは終わったんじゃない？早く報告してレイシスちゃんのお家に行きましょう？」

「そうですね。私の家に来て？お菓子用意してるから！！早く遊ぼう？」

『うん』

また四人で来た道を戻ってフェルシスに行く
二人が報告したのを見て私たちはレイシスちゃんの家に行くことにした
私もレイシスちゃんの家に行くのは初めてだから少し楽しみだ

『Ｌｅｔ' ｓ　ｇｏ　レイシスちゃんの家へ！！』

双子ははしゃいでるし…

私とレイシスちゃんは顔を見合わせて笑ってしまった

少しはしゃぎすぎかな？

まぁ初めての場所に行くのは私でもウキウキするから仕方がないのかな？

皆で楽しく話しながらレイシスちゃんの家へ向かった

第十五話　戦闘の心得（後書き）

どうだったでしょうか？

次回はお宅訪問となります
そのあとで海底ダンジョンのお話です

前書きでも書きましたが感想ください！！

めざせお気に入り件数１００
感想２０件越え

を目指していますのでよろしくお願いします！！

第十六話　お宅訪問（前書き）

ちょっと間が空いてすみません！！
これを機にお気に入り９５行きたい桜川リマです！！

感想も欲しい……
前回とてもうれしいご指摘が来たので今回直せてきているか心配です＾＾

ではどうぞ～

第十六話　お宅訪問

「わわ～ひろ～い」

「こ、こわいよ、お姉ちゃん」

「ま、まさにネクロマンサーの館みたいね」

「怖がらせてごめんなさい。でも、これは私のかつての友達の遺品なので」

「遺品？それって使い魔が死んだときにたまに残すっていうアイテム？でもレイシスちゃんって使い魔いないよね？」

「はい。私には復活させた友達しかいないのでその子たちが残した遺品です。」

知らなかった。まさか、ネクロマンサーにもそんな効果があるなんて私もネクロマンサーになったことはあったけど、スキル集めに夢中になってたからモンスターと仲良くなろうなんて考えもしなかった。ただのスキルを溜めるために何の関係もないモンスターを再生していただけだからな～。

ところで、私たちは今レイシスちゃんの用意した転移石でレイシスちゃんの家に行っている。レイシスちゃんの家はまぁ……すごかった。外観はただの広い家だったが中はいろいろな毛皮や骨、武器などが置いてあってかなり不気味だ。

「へ～これって結構レアなものじゃん。市場に結構高値で売ってたよ～」

「そうなんですか？でも、売る気はないので。だからこの家に飾ってるんです」

双子は今、部屋を好き勝手に見回っている。全く落ち着きのない子たちだ。

「あ、そうだ。私の新装備にこの子達の素材を使ってくれませんか？そっちのほうが喜んでくれると思うので」

「いいよ～。武器は何がいい？たいていのはあるみたいだけど……ネクロマンサーだったら杖か鎌かな？いや、鞭もあるか」

「では鎌でお願いします。一番しっくりくるので」

「わかった」

私は素材とおおもとになる武器を探す
鎌だったらおおもとは鎌でなくてはいけない
少し探して何個か素材と武器を取ってレイシスちゃんの所へ戻る

「これいいかな？おおもとは『死神様の鎌』で行こうと思うのだけど」

死神様。あるダンジョンにいる死神族の上位モンスターだ。
そのモンスターが持っている鎌がそのまま残されたのだろう

「この子のですか～いいですよ。この子は最初あまり心開いてくれなかったんですよね～でも仲良くなるとすごい仲良くなったんですよ～」

「え!?ちょっと待ってここにある遺品の全部のモンスターがどうだったか覚えてるの?」

１００個以上あるのに?

「はい。だって思い出ばっかりですから。今は誰もいないからさびしいですけど、何人もいるとここのにぎやかなんですよ～」

「へ、へぇ～」

すごい。なんて記憶力なんだろう

なんかレイシスちゃんがとてもおしゃべりになった気がするけど……

「じゃあこれを使わせてもらうね。そういえば双子はどこまで行ったの?なかなか帰ってこないけど」

「ああ～確かに広いですから迷っているかもしれません」

いや。はしゃいでいるだけだと私は思うが

二人で探しに行くと案の定一つの置物の前ではしゃいでいる二人を見つけた

「何やってるの?」

「そろそろ私の家に行かない?ご飯用意してるし」

『わかった～』

「あの……先程から気になってたのですが胸ポケットから顔出して

るのはフェアリーですよね」

あ、ルネのこと忘れてた。いい子だから黙っていたのかな？

「ＺＺＺ」

違った。私の胸ポケットで眠っているだけだった

「この子はルネ。私の使い魔になるのかな？一応プリンセスフェアリー」

『ええ～！？希少種であるフェアリーの中でも一番希少なプリンセスフェアリー！？』

「どうやって捕まえたんだお姉ちゃん？」

「そのん言葉使いやめなさい美月。そんな言葉遣いしてもかっこよくないから。あと捕まえたんじゃなくて仲良くなっただけ。使い魔ってのは捕まえるだけじゃないんだよ」

使い魔には二つのやり方がある
力でしたがわせる方法と仲良くなることの二つだ
私のは後者になる。まぁ助けたのが一番の出来事ではあるが

「じゃあわたしの家に行くわよ。うちはちょっとすごいわよ～」

皆に転移石を渡す
光の道を通り抜けるとそこは慣れ親しんだ我が家ヴィースが目の前に

「ここ～？なんか小っちゃくない？」

美月。大きさ的には小さくはないわよ。レイシスちゃんの家が大きかっただけ

「なんか奥にあるんだね」

まぁ路地裏が好きだったから。私と同じように影が薄いところが好きだから

「なんか趣がありますね。この看板は……お店を営んでいるんですか？」

まぁね。と、それぞれの感想にこたえて中に案内する

「私の家は、雑貨店兼工房を営んでいるの。まぁ工房は趣味だから一般には公開してないけど」

三階まで一通り案内してから、お茶を継ぎ机に並べるまりあはもう出かけたらしく『あとでよろしくね～』というメモが机に置いてあっただけだった

「何か欲しいものがあったら言ってね。身内価格で安くするから。あと、ここまで自力で来れるようになったら3階の部屋も使っていいわよ。装備品はそれが最高の奴だから新しくはできないからね」

『は～い』

「ルネ、起きなさい。温かいハニーミルク入れてあげるから」

「ｚｚｚ……う、ううん……？……あれ？いつの間に眠っちゃって

たのですか？」

「向こうについた途端眠ってたんじゃない？優奈たちに会う前にはもう眠ってたっぽいし」

「ふぇ？もう双子さんたち来てるんですか？」

「ていうかもう家に戻ってきちゃったわよ」

ルネはまわりを見渡すと他のみんなにのほうを向き慌てて頭を下げた

「わわっすみません。申し遅れました。フィルちゃんの使い魔のルネといいます。よろしくお願いします」

『は、はぁ……よろしくお願いします』

皆慌てたルネの姿に驚いてびっくりしているが、しっかりと返事をしてくれた。

「さてっと……優奈たちはこれからどうするの？レイシスちゃんは攻略組のチャットログを見るかぎり攻略組に合流するみたいだけど……」

「そうですね。私は攻略組に合流します」

「私たちはクエストをこなしながら熟練度上げて早く目標の職業になれるように頑張る」

「うん」

「だったら私も攻略組じゃないけど行ってみようかな～私が行っても無駄だと思うけど」

攻略組のチャットで上がったところは決してほかのプレイヤーが行ってはいけないわけではない
ただ攻略組の人が行くというだけだ

「そんなことないですよ。フィルさんは攻略組の命の恩人なんですから」

「そんなんじゃないって。ただとどめを私がさしただけ」

「お姉ちゃんの話聞かせて～」

「きかせて～」

「じゃあ夜ご飯食べながらね」

結局、夜ご飯では話し切れず、布団の上でも話すことになってしまったが……

その間に三件メールが来た

『フィル？今攻略組は地下４階まで攻略したわよ。ダンジョンは泳いで中に入るけど中は陸地みたい。ただじめじめして気持ち悪いけど…闘いにくいし…モンスターもこれまでと違って強いわ。一体一体が強いけど集団でも出るわ。あなたももし来るつもりなら用心しなさい　ｂｙミルキー』

『明日はクレイ岬で待ってるね～　ｐｓ双子ちゃんはどう？　ｂｙ

まりあ』

『リーダーに聞いた。また聖母に勝ったんだってな。また今度落ち合おう。武者修行の旅もちょっと休憩するつもりだからな。　ｂｙクロード』

うん。二つ目の無視しよう

第十六話　お宅訪問（後書き）

どうだったでしょうか～

面白いと感じてくださったらうれしいです。
最近はおもしろいＶＲＭＭＯＲＰＧの話が増えてきたから読者さんが離れてしまわないか心配ですｗｗ

ぜひぜひ感想ください
お願いします！！

あ、あとこの後書きコーナーで何かやってほしいという要望があったら随時お知らせください！！

この物語世界観とかわかりにくいかもしれないので……

でわまた次回～

でわでわ＾＾

第十七話　スリースノーツリー（前書き）

始めに謝っておきます！！

今回は短いです

次からはもっと長くいつも通りになれるようにします！！

第十七話　スリースノーツリー

「美月～優奈～レイシスちゃ～ん。朝だよ起きて！！」

朝ごはんを作りみんなを呼ぶ
ルネは今、私の隣の席に座って蜂蜜（私の特別性）を飲んでいる

「ルネ。起こすの手伝ってよ！！」

「チューチュー……フィルちゃんフィルちゃん。私は今忙しいので無理です」

「あんたは全くもう……食べ物を食べている間は何もやってくれないのね」

フィルは食べ物を食べている間は何もやってくれない
食べ物大好き……いや、甘いもの大好きっこなのだ

「まぁしょうがないか……あ、レイシスちゃん。お早う」

「おはようございます」

レイシスちゃんが可愛く欠伸しながらリビングに入ってきた

「双子起こしてきてくれない？私そろそろ行きたいからさ！！」

早くいかないと攻略されてしまう。
水中ダンジョンだったら私のお気に入り装備の一つが使えるのに……

お気に入り装備『雷神装』

雷属性特化型の装備だ
水属性の敵にはかなり有効だ
水属性攻撃からの耐性もばっちりだし
しかもこれは職業『ライトニングウィザード』の装備だから雷攻撃も強い
ある意味水属性の敵には最悪の装備だ

「だったら行ってきていいですよ。私はもうちょっとあの子たちと遊んでから行く予定なので」

レイシスちゃんの言葉に私は感動！！

「だったらそうさせてもらう。えっと、どの転移石で移動しようかな？」

私は棚から転移石を取り出して呟く
転移石は、様々な場所に一瞬で行ける最高の道具だが高いのと町にしか移動できないから大まかな場所にしか行けない。
だから、前回のシーズン諸島には観光地であって町というものがなかったため移動できなかった
その代り『時魔道士』のテレポーションは場所ごとに指定できるためどこへでも行ける。その分距離によってＭＰの消費量が違うけど

「フィルさんの転移石は自作ですか？」

「うん。そうだよ～。だって作り方がわかったら買うよりもそっちのほうが楽だし……あ、そうだ。レイシスちゃんの装備、向こうで作っちゃうから素材持っていくね」

「わかりました。ありがとうございます」

「じゃあ行ってくるね～やっぱりエスカリア大陸の北部だから『スリースノーツリー』が良いかな？」

「あそこに行ったことあるんですか。結構山奥ですけど奥が海ですからそこがいいと思います」

私は双子をレイシスちゃんに任せて一人行くことにする
持っていく道具はテントと水中ランタン、回復薬少々といったところだろうか

転移石を使って移動するとそこは一面雪と木で覆われた街並みだった
ここはスリースノーツリーというエスカリア大陸最北端に位置する場所にできている町である
名前はおかしいがここの住人はとても和やかでありとても過ごしやすい場所だ
ここからさらに奥にある場所には海があり今回はそこが攻略対象となっている

「ルネ。あなたは水の中に入っても息が続か無いでしょう。待ってる？それとも……」

あるものを一つ見せる
小さなカプセル
ルネが何とか入れるカプセルだ

「もちろん入りますよ～私はフィルちゃんといつも一緒です。あの時から」

「はいはい」

カプセルの中に入ってもらって私と紐でつなぐ
そして落ちないように胸ポケットに入れようとして気づく

「私まだ雷神装になってないじゃん……」

私は自分の失態にあきれながら転機の書を取り出す

「職業――ライトニングウィザード」

職業を変え来ていた服装から雷神装に変える

「ルネ大丈夫？」

「大丈夫です」

これから泳ぐ。
そのためには水着に着替える必要があると思われがちだがそれは違う
水着は泳ぎスキルに補正がかかるだけだ

泳ぎ始める
途中までは船という手もあったが別にそんな必要もないので泳ぐ
ぶっちゃけていうと私の泳ぎスキルの効果と筋力補正などが入ると
船の移動よりも速い

（敵に見つかるのは嫌だし攻撃くらうのも嫌だな……）

「マ・デルタ・ライト・デ・マカ・クルト……『ライトボール』」

雷でできた光の弾が手にできる
それを私はふたつつくり手に持った
これで敵が来たらぶつけて倒すことができる
足りなくなったらもう一度作ればいい
まぁ水中で詠唱することはできないから威力は劣るけど

後ろを振り返るともう岸は見えなくなっていた
そろそろだろうと思い潜る

水中は一面の緑だ
緑というのはこの水中の底にある砂が影響している

何度かモンスターを倒しながら奥へ奥へと潜っていくと洞窟がある
のに気が付いた
以前にはなかったものだと思う

そう思い中へと入っていった……

第十七話　スリースノーツリー（後書き）

ホントにすみません！！
次からはもっとわかりやすく戦闘シーンとかも入れていきたいと思います

次からが私の本気ですので！！

ですので！！感想ください！！↑どういうこと？

感想くださると本当にやる気が上がりますので

でわでわ

第十八話　ヒロキのちから（前書き）

こんにちは桜川リマです

この頃オンラインゲームにはまっておりますｗｗｗ

受験生なのにｏｒｚ

ぶっちゃけ楽しいです

名前は剣と魔法のログレスって言います

ユーザー名は同じ桜川リマですので見かけたら声かけてください

第十八話　ヒロキのちから

「またかぁ」

ため息交じりに呟いて片手で魔法陣を作る
魔法陣を素早く作り目の前の敵『エリートアリゲイターＬｖ１１８』に放つ

「雷電の神よ我に力を『トール・ハンマー』！！」

手に持った小さなハンマーを相手に向けると相手に向かって強大な雷のハンマーでの攻撃が出る
相手のＨＰゲージを一瞬で奪い取り消えていく

「私の持つ武器と同じ名前の技っていうのもなんか変だけど……ま、いいか」

私の武器ミョルニルは神話でいうトールが使っていたハンマーである
別名トール・ハンマーともいう

このような武器をレア度ＧＯＤ級と言い、神々の名前のモンスターを一番最初に倒さないと手に這いあらない代物だ

だから持っているのは私だけだ
他にもいろいろあるが私はそれをトレードやきょうか……話し合いによりすべて集めている
今回、このダンジョンをクリアしようと思ったのは理由がある
海底ダンジョンなんて初めてだから神話のモンスターが出るかもしれないからだ

「フィルちゃん。向こうにモンスターの大群が！！」

「ああ～きっとヒロキだね」

奥にモンスターか人の集まりでできる土埃が見える
たまに技のエフェクトが見えるから戦闘中なのだろう
あんなに大きな土埃になっているということは一人で集めるのには無理があると思う
きっとＭＰＫもどきをされたのだと思う
なぜもどきかというとそれは相手がヒロキだからだ
ヒロキの二つ名は『静なる拳』
この由来は周りが静かになるまで戦うのをやめないと理由からだ
だからか、戦っている最中は人格が変わり、周りが静かになるまで見境がなくなる
その代りとてつもなく強い
で、なぜＭＰＫされるかというと、周りが見えなくなるためモンスターが増えても気づかないのだ
だから、攻略組のみんなは早くに攻略するためにヒロキにモンスターを任せて先を急ぐのだ

「じゃあ私たちもお願いしちゃおうか」

で、私もそれに便乗する
先程から周りからモンスターがわいてきてうざいったら仕方がなかった

「ですね♪」

ルネもわかっているから何も抵抗しない

そのまま通り過ぎ、無言でヒロキの横を通る
その時にターゲットを私からヒロキに変えさせておくのを忘れずにおく

「……」

ヒロキは無言のままひたすら狩っていた
正直って怖い
無言で倒すとか怖すぎる
確かにヒロキの職業モンクは、攻撃力が単純に高いのでスキルを使わなくても大丈夫なのだが
やはり怖い

私たちは速度を上げながら遠ざかって行った
奥ではすでに討伐隊が組まれていた
もちろんボスのだ

「おや？今回は強運のあなたも参加ですか」

そこで待っていたのは眼鏡をかけた青年、クロイツだ
疾風必勝の参謀役でβテスターの人間だ
今は何やら紙を手に持っている

「今回あなたはどういった目的で？」

「私の目的は決まっているわ。ＧＯＤアイテム収集。それ以外にいはないわよ」

「あなたはコレクターですものね。いったいどれくらいお金を持っているのですか？」

「私お店経営してるから。知ってるでしょう『情報屋』さん」

「ええ。今度使わせていただきましょうか。」

「その時は御用達にしてくださいね」

にこっ
営業スマイル
ちなみにルネは今私の胸ポケットに隠れている
人見知り激しいから仕方がない

「では、またコレクトと。今回の神はなんだと思いますか？」

「やっぱりポセイドンでしょう」

「じゃあ装備はトライデントですかね」

「だろうね。装備するときはきっと槍に分類されると思う」

「おっと。ヒロキの到着です。よくあれだけのモンスターを倒せますね」

「まったく。あ、もう一人呼ぶから。聖母のまりあ様を」

「ＰＴを組むのですか……めんどくさいけどいいでしょう。チェックしておきます」

先程からクロイツが行っていた行為
それは今回参加するメンバーの目的と職業だ

これはもし討伐できなかった時のための参考&情報売りのためだろう

「じゃあ私はこれで」

戦闘時以外のひろきは苦手なので逃げるように退散する
まぁ戦闘時の姿も怖いんだけどかっこいいとは思う

「ルネはまだ出てこないの～」

「怖いですので」

「じゃあまりあよぶね～」

まりあにＰＴ申請を送る
きっといまでもまっているだろうから一応送っておかなければ

Ｆｒｏｍ　まりあ

内容　ＰＴ勧誘のお知らせ
入る？入らない？好きにしなさい
今ボスの部屋の前
もしＧＯＤ級の装備が出たら渡しなさいよ
言い値で買うから

でわでわ

ＰＳ．ミルキーもいたわよ。よかったわね

第十八話　ヒロキのちから（後書き）

今回も短くて済みません

次回ボス戦です

少し長くするようにしたいのでお願いします

感想いただけると嬉しいです

目指せ感想増加！！

目指せお気に入り登録１００件越え

を目指していきたいと思うのでお願いします！！

第十九話　ポセイドン（前編）（前書き）

どうも桜川リマです
今回遅れたのは感想が……

一言でもいいのでください！！

例えば、お気に入り件数１００件いったらなんかやるんですか？
みたいな！！
そしたら絶対に返しますので！！お願いします！！

第十九話　ポセイドン（前編）

今回のボスの間の前に集まった攻略隊の人数は４３人
主力メンバーを紹介しよう
剛腕の二つ名をもつ疾風必勝のリーダー、グレイドル
情報の二つ名を持つ疾風必勝の参謀、クロイツ
魅惑の二つ名を持つテイマーのシルク
静なる拳の二つ名を持つ戦闘時は怖いヒロキ
聖母の二つ名を持つほんわか系攻略者まりあ
……以上が攻略組のメンバーだ
二つ名だけで言ったらあと５人いるが置いておこう
この中で私が仲がいいのはまりあしかいない
私の中がいいのは現在私の隣でボウガンの整備をしている長髪のスナイパーのミルキーである
二つ名は持っていないがスナイパーとしての腕は確かであり相手の急所への攻撃はとてもうまい
私は若干ヤンデレかな……と思ってたりする
情報などを毎回教えてくれたりする基本いい人である

「相手はきっと人型よね」

「わからないよ。かなずしもＧＯＤ級のモンスターとは限らないしポセイドンなら聖獣の馬を従えているかもしれないから」

ミルキーは神話にまで精通しているのか
驚きながらも記憶にとどめておく

「ミルキーはどうやってきたの？」

「私はリーダーに呼ばれたから来ただけ。」

「ああ、グレイドルさんから召集されたんだ」

ミルキーは疾風必勝に属しているから呼ばれたのだろう

「あ、まりあ～」

「まりあさんこんにちは」

まりあがこちらにやってきた

「まりあ～今回はあいつ呼ぶでしょう」

「あの子～助けてくれるかな～？」

「まりあさんの使い魔ですね。見てみたいです！！」

まりあは使い魔とともに行動していない
それは使い魔が自由奔放なためである
それでもまりあとの相性はとても良い

「じゃあ呼んでみる～」

使い魔との秘密回線を開くまりあ
何やら話しているが徐々に世間話になってきたような気がした

『ご飯食べてる～？教会の人に良くしてもらってる～？え～？またレベル上がったの～？』

聞こえてくるのはそんなのばっかしだ

『で～来れるかな～うん～そう～え～ほんと～ありがとう～』

「来れるって。じゃあ呼ぶね『召喚』ちゅーちゃんおいで～」

目の前に光輝く円が出てきてそこからモンスターが現れる
そろった小さな耳、細く長いしっぽ
中から出てきたのは人型の猫だった
ケット・シー
それも珍しい雄の三毛ケット・シーだ
なぜネズミのような名前かはわからないけどもこの子がまりあの使い魔である

「ちゅーちゃん来てくれてありがと～」

「……今暇だったから」

「今日はよろしくね～」

「……うん」

無口なケット・シーだ。
まぁそれでも仲がいいのは確かなんだけど

「じゃあそろそろ入りますよ～」

クロイツの一言により皆が中に入った
奥に行き目についたのは馬。
人の身体の二倍はある馬だ

大きな円型のフィールドに馬にまたがる人間がいた
――やはりポセイドン。ＧＯＤ級か
乾季で腕が震える
フィールドには何もない
きっと周りの壁は壊せるだろう
だったら初めにやることはただ一つ
何人かが馬に向かって切りかかるのを見ながら私は壁に呪文を唱える
「サンダー！！」
初級魔法を唱え段差を作っていく
倒すには馬を倒した後でなく本体を狙ったほうがいいだろうという考えからだ
ミルキーも同じことを思ったらしくボウガンで周りの壁を破壊していく
程なくして石の階段と小さなステージが出来上がった
それが、私とミルキー以外で作った人たちのを合わせて三個出来上がっている
急いで魔術師と遠距離隊は登っていく
「ミルキー余裕そう？」
「全然。水攻撃にボウガンは弱いのよ」
「じゃあちょっと大技を使いますか」
階段を上るのをやめ下に降り始める

近くにいる中で一番強いのは……ヒロキか

「ヒロキ！！」

「……」

ぼすっがすっ

「ヒロキ！！」

「……」

無言でらちが明かない
しかし、馬の細い脚に着々とダメージを与えているからとてもうまいと見える

しょうがない

「マ・デ・ファルア・ドク・デ・エテリウス『ライトニングアーマー』！！」

私に雷が落ちてきてそれを私は身にまとう
ライトニングアーマーは短時間の間に守備を捨てスピードを手に入れるまほうだ

スピードは5倍
忍者のように常時とはいかないがものすごいスピード・脚力が出せる

私はヒロキの片手をつかみ石段の上のステージを目指す

「……ふぇ？何でここに……フィル？何をするつもり！！！」

やっと気づいたヒロキが効いてくるがもう遅い

「簡単に説明するとあなたは本体を叩きなさい。今から馬の上に乗っけるから」

「えええええ！！？？そんな無理だよ！！あんな魔法で五月蠅いところだなんて」

「そういいつつ五月蠅いほうがあんたは強いんだからいいでしょ」

私はステージから馬の上を目指してジャンプする
ぎりぎり届くだろう
馬の背に乗った私はヒロキを置き呪文を唱え始める
遠くから撃つより近くで撃ったほうが当たりやすいからだ
ヒロキはもう相手のもとまで言っている
ポセイドンはヒロキの攻撃に気づいたのか体をくねらせてトライデントで薙ぎ払おうとする
そのたびにヒロキは避け私にはものすごい風圧が襲ってくる
ものすごい力だ。この前のケルベロス戦とは比べ物にならない
馬の攻撃で近距離戦闘者たちを薙ぎ払い
広範囲水魔法で後衛職を倒す
私は風圧で飛ばされそうになるのをこらえながら呪文を唱える
ひろきは無言で殴り続ける
時たまくる外れた魔法をうまくよけながら

「ライトニング・ボルテッカー！！」

「……」

「トール・ハンマー！！」

「……」

「ブラック・サンダー！！」

「……」

「ファイアーボルテッカー！！」

「……」

「……」

「……」

「……ヘブンズボルテッカー！！」

「……」

「ジゴスパーク！！」

「……」

徐々にだが減っていくのがわかる

私一人の力じゃ無理だがこの調子で行けば大丈夫だろう

ケルベロスのような手負いで変化しなければ

「ヒロキは黙りすぎだと思いますです～」

「あれは病気よ。ルネ」

第十九話　ポセイドン（前編）（後書き）

感想ください！
お願いします！！
もうすぐお気に入り登録１００件
それに便乗してレビュー・感想の増加をがんばります！！

第二十話　ポセイドン（中編）（前書き）

桜川リマです！！
ついに来ましたよ！！
お気に入り件数１００件越え

これもレビュワーを書いてくださった方のおかげです！！

次の目標は１５０件！！
いきたいと思います

感想お願いします！！
批評でも可です

どうぞおねがいします

でわ本編へ～

第二十話　ポセイドン（中編）

ポセイドンとの戦闘が続いてすでに一時間
私は馬の上という不安定な場所でせっせと呪文を放っている
すると突然馬が大きく震えた

「な、何!?ルネ!!」

「はい！」

ルネを胸ポケットから召喚!!
ルネは空高く飛行を始める
私は体勢を崩しながらもなんとかしがみついた
ルネを出した理由は私を見えにくくするための魔法を唱えるためと
強化スキルを唱えてもらうため、あとは馬のＨＰバーの減りを見てもらうためである

「ルネ!!『バリアス（攻撃アップ）（大）』かけてあとパウダーウィンド」

パウダーウィンドによって姿が一瞬白い靄で覆われ消えていく
フェアリーの姿隠しの技である

「ヒロキ!!……はいっか」

ここは下にいるみんなによって崩壊（討伐）するだろう
下にいる近接系のみんなにとっては足を叩くだけという地道な作業だったと思うけど……

落ちていくとそこには有名なグレイドルさんが前足相手に数人と一緒に戦っていた

「らちがあかねぇなぁ！！『ヘビィスタンプ』！！」

槌系の技を両手斧で繰り出す一撃を繰り出しながらぼやいている
さすが剛腕の二つ名を持つだけある
ルネが言うには少しではあるがその一撃だけで目に見えてＨＰが減ったらしい

他のメンバーも疾風必勝のメンバーのようで、とても連携が取れているといえるだろう
闘い方の基本である『スイッチ』上手くできているし

スイッチとは技を使った後の硬直時間を使った戦い方のことで
一人が硬直した直後に他のが技を放ち硬直中での攻撃を受けないようにする技だ
これを数人で使うことで大規模の大技などを使うことができる

硬直時間で一番長いのは各スキルの最終スキルである『ヘル・ヘブン系』である
私の場合は、忍者になれば装備品効果のおかげで無かったようなものにできるためあまり関係ないと思う

まぁほかのライトニングマジシャンとかなどでは、もろ受けるのだけど

私の姿が見えてない皆は攻撃に専念しているため私は足での攻撃を避けながら後衛職のいるステージへと戻っていった

現在の馬『ヘルウァンド』のＨＰ　約５０％
ポセイドンのＨＰ　約９７％

☆

私がステージへ戻るとそこには必死に弾を打ち続けているミルキーがいた
私は術を解除する
ここからは私の第二の仕事の番だ

「ミルキー弾いる～？」

「……魔雷炎弾Ｌｖ１７加速雷弾、神木・無音弾、各１５０個ずつ」

「はい。まいど～」

小さくそして迅速に答えるミルキー
私の知っている人たちは何で無言の人がたくさんいるのだろうか

「……ふぅ……私はただ集中したいだけであって無言なわけではないわよ。っていうかあんたの売っている弾は普通のがないのよ！！効果が高いからいいけど」

「私のは全部手作りだからね～あ、新しい弾あるけど買ってく？」

「買う……なんていう弾？」

「死氷冷高速弾！！」

「いらないわよ！！相手は水属性よ！！さっきからこの雨や水柱に悩まされているっていうのにそんな弾使えるか！！……効果は？」

「超高速で放つほか、リロードの速度アップ、触れた場所により相手を死に至らしめることあり……まぁクリティカルでデス機能付きってわけ。当然ボスには使えないけど馬に使ってみる気は？」

にやり。

まぁ無理だと思うけど使ってみてほしい

新作の威力を見てみたいだけであるが

「試さない。ボス戦の敵ではきっと無理だからザコ敵ならまだしも……でも買うわ５０発」

「はいまいど～」

トレード画面を出して交換をする

私の仕事はお得意様に道具を売ることである

ミルキーに売り終わった私は周りを見渡した

「フィルちゃ～ん～私にも売って～」

「あ、まりあ。何がほしいの？」

ステージの後方で傷ついた仲間を癒しているまりあのもとへ行くとまりあがトレード画面を出してきた

「チューちゃんに保護魔法をかけなきゃだからＭＰ回復用にエムピン（大）４０個～保護用魔法薬（使い魔専用）を各パラメーターごとに２０個ずつ～あとあと～」

「それくらいで十分よ。全くあんたはチューシのこと心配しすぎ。あれでも攻略組の使い魔として強いんだから安心しなさい」

まりあはチューシのことになると過保護なところがあるケット・シーは中級モンスターだが、まりあの過保護と本人のひたむきさのおかげか、攻略組の使い魔としてとても強くなっている

「私は次行くから」

「いってらっしゃ～い～」

まりあに見送られ私も走りながら周りを見渡すとシルクさんを発見した

シルクさんは魅惑の二つ名持つテイマーで、いつも何匹化のモンスターを連れてくる人だ
今もモンスターに支持を出して戦闘に参加しているテイマーは支持とサポートの職業のため技もサポートばかりだちなみに私は面識はあるがあまり話したことはない

「ライトドール！！『スパイラルエコー』！！」

サポートスキルを唱え一瞬で二度攻撃できるようにしたシルクさんを横目に私は手助けが必要そうな人を探した。

現在の馬『ヘルウァンド』のＨＰ　４５約％
ポセイドンのＨＰ　約９５％

まだまだ続く

第二十話　ポセイドン（中編）（後書き）

まだまだ続きます
感想ください！！
返信しますから

あと、お気に入り件数１００件越えを記念して何かやりたいと思っています！！
何でもいいです
こういうのが読みたいというのがあったらぜひ送ってください

でわでわ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5944r/

ヘブンヘルズ　～二つの世界と目立たない私～

2011年12月18日00時46分発行